
黒髪黒目の少年勇者

Excellent

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒髪黒目の少年勇者

【Nコード】

N03440

【作者名】

Excellent

【あらすじ】

いきなり異世界につれてこられた、蒲原零斗^{かんばしひろいんと}は、カイという名前を付けられ、ロミという女の子と旅をしなくちゃいけなくなった。カイは新たな世界で平和に暮らせるのか!?!?!というお話。近況：ついに旅にでる！

登場人物紹介+町名、技名(前書き)

Warning

ワーニング

ストーリーを全部読まないでネタバレになります

本編がすすめば、こっちも更新されます

登場人物紹介＋町名、技名

w a r n i n g ウーニング

ストーリーを全部読まないでネタバレになります
本編がすすめば、こっちも更新されます

人物紹介

カイ：ちよつとやんちゃな性格で恥ずかしがりやでもある。この物語の主人公

ロミ：元気で明るい性格で、細かいところによく気づくサポート役
フランクリ：カイとロミにジジイとよばれるただのジジイ（ティ
ナイルの村長でもある）

ガリル村の村長：名前は不明、フランクリをジジイと呼ぶ、黒が
好き

ボス：名前不明、ロミを襲った犯人、実はいい奴

村の名前

ティナイル：一番最初の町、フランクリが村長、戦った八大魔族
はジャネット

ガリル：ティナイルの北にある小さな町、忒の刀、壱の矢の本が

ある

ローレック…???

技の名前

最弱魔法

最強魔法

火… ファイ ファイア フレイム フレイマー フレア
水… ウオタ ウォーター アクア レイン ウェーブ スプ
ラッシュ

雷… エレキ エレキテル ライ サンダー

氷… アイス コールド フローズン ブリザード フリーズ

土… ストーン アース アスラ ブロック クエイク

光… ライト ライトニング ホーリー シャイニング サンシ

ヤイン

風… ウィンド エアロ ジャイロボール ハリケーン トルネ

ード

闇… ブラック ダーク ダンクネス グラビトン

剣技

壱の刀… ブレイクソード 疾風斬 アサルトチャージ 居合い
斬り ビートラッシュ

弐の刀… スパイラルカット（水） 瞬刃 区切り 八刀一閃

獄門

参の刀… 神達 ?? 天照（雷） ??

ボウガン技

壱の矢… ポイズンショット（闇） クロスショット

八大魔族

ジャネット…ティナイルにいた八大魔族で、八大魔族の中で一番弱い。手下はジャデツパ。

ドスマーク…ガリルにいた八大魔族、人の形をしている、手下はオノマーク

気づくの遅いけれど、大体の技がFFですね…攻撃方法は、違うことにしています。

作者はFFファンではないのです。

プロローグ

「あれ？ここはどこ？私はだれ？」

記憶喪失ではない、まじめにわからない。

「昔のことは思い出せる…」

地球の日本で生まれたいたって普通の人間…中学生で、男の、名前は…？

「あれ？名前？…なんだっけ…あ、零斗か」

…というよりここはどこだ！

「名前はどうでもいい！ここは！？地球か！？」

目の前には、森、川、そして小さな明かりだけしかみえない…
…明かり？

「明かりだ！人がいるかも！」

僕は明かりに向かって歩くことにした

数十分後

「なぜ…明かりがあるのにいけないんだあああああ！」

進んでも進んでもなぜか明かりが近くにこないのである。札でもあつてあるのだろうか。

「くそお！進んでやる！」

さらに1時間後

「なぜだああああ！なぜ明かりのところまでいけないんだあああああー！」

足も痛くなつてきたし、そろそろ着くだろう、という距離を歩いたのになぜか進めないのである

多少自棄になつて叫ぶと、どこからか音が聞こえた。しかしそれは人間の音ではなかった…

「グガアアアアアアアアアアアアアア！…！」

「く、クマ？…じゃねえ！ドラゴン！？」

ここは地球じゃないのかとつっこみたかったが今はそれどころではない。

「うわあああああああああああああー！」

まずは逃げなければ！そう考えて走つていった。明かりのあるほう…

そして1時間後

「ゼーゼー・・・なんで、俺はこんな目にあわなければいけないんだ...」

(それはあなたがこの世界を救う勇者だからです。)

「誰!?!」

いきなり頭の中に声が響いた...テレパシーのような感じだ

(私はこの世界をつかさどるもの、名前は...「レミ」「とても呼んでください」)

「つかさどる...ってそれって神様?」

(そう...ともいえますね。とりあえず私が教えることは、ここは地球ではないこと、あなたが勇者であること、そして...もう二度と地球には戻れないこと...)

「は!?!?なんで戻れないんだ!」

戻れないって...俺は地球に戻れないのか?

(私のミスです...転送の時、誤って魔術式を組み違えてしまったのです。)

「...魔術?そんなものが使えるのか?」

(地球にはないですが、この世界にはマナというものがあります。)

それを使い、魔術が使えます)

「ここにはあるの?」

(はい、この世界にはマナがありますね…それと残念なことに、もうお別れです、1日1分しかこのテレパシーは使えないんです…困ったことがあったらいつてください、一日1回ですけどね…ではさようなら)

「ちょ、待ってください、まだ聞きたいことがたくさん…いつちやっただか…」

ここであたりを見回してみると、建物らしきものが見えた

「あれ?いつの間にか明かりのところに来たのか?」

とりあえず、その建物の所に行ってみることにした。

というか、いきなり過ぎないか?

プロローグ（後書き）

どうも、guretoです、よく見るとオンラインゲーム「マビノギ」からちよつとパクってるのはマビノギをプレイしている人はわかると思います…（町の名前とか、技の名前とか）、しかしストーリーなどはぜんぜん違いますwで、しかもなぜか、主人公は、ボクと同年という設定…名前はぜんぜん違います。では亀更新ファンタジーストーリー開幕です！

一章 第一話 マトウー？なにそれおいしいの？

「こんばんわ〜…」

建物に入ってみたが返事がない

「だ、誰かいますか〜？」

するとどこからか床がきしむような音が聞こえた

「すみません…道に迷っちゃったんですけど…」と、言った瞬間黒い影が目の前に見え、話しかけられた。

「 × …… ? …… ! 」

なんかいきなり、何語かわからない言葉を言ってきたので、ビツクリする。

「は、はい？」

「 ……これでわかるかね？」

「あ、日本語だ…でもどうして？」

「言語魔法だ、こちらの言葉が通じるようにした」

魔法…レミが言っていたやつか…言語魔法なんてあるのか…

「魔法…ですか…あ、まず聞きたいんですけど…」

「ん？なんじゃ？」

「ここはどこですか？…」

「…記憶喪失かね？」

「違います、僕はレミという人にここに連れてこられたんです。」

「レミじゃと！…？レミはこの世界の危機を救われた神…なぜそんな…ハッ！よくみると黒髪黒目…」

「それが…なにか？」

黒髪黒目がどうかしたのだろうか。

「く、詳しいことは中で話そう、入ってきたまえ」

「あ、ありがとうございます…」

「黒髪黒目は、このマトウーではないんだ」

マトウーってなんだろ…

「マトウー？」

「…本当に何も知らないのかね」

「はい、まず僕はたぶんこの世界の人間ではありません」

「な、なんじゃと!?!その話を詳しく聞かせたまえ」

「って言われてもな…気がついたらここにいたし…」

「僕もわからないんです、でもなんかその世界にはもう、もどれないらしくて…」

「…レミ様がミスをしたと?」

「らしいんです、レミがテレパシー魔法を使って教えてくれたんです」

「ホー…で、君はこの世界の勇者なのか…?」

「勇者…そういえばレミがあなたが勇者だって言っていましたね…」

「やはり!黒髪黒目は勇者しかいないとされているんだ!」

「ってことは何だ、黒髪黒目でみつかると大変なことに…なるのかな?わからないや。」

「そうなんですか…?そういえばマトウーとはなんですか?」

「この世界の名前じゃ。ここはティナイルという小さな村なんじゃが…最近、魔獣が出没しての、皆を困らせているんじゃない。」

「魔獣…そうか…魔法が使えるんですもんね…」

「君の世界に魔法はなかったのか？」

「ないです、科学はありましたけどね」

「科学か…こつちにもあるが魔法よりは技術は劣るなあ…話を戻す。勇者の力量をみてみたい、魔獣退治を引き受けてくれないか？」

「…え？魔獣退治…？」

「うむ、勇者としての素質もみたいs「待ってください！僕は普通の中学生ですよ！？そんなことできません！」

勇者はいきなりレベルはあがらないしね…最強状態から始まるわけじゃないし…！

「しかしのお…レミ様が呼んだということは、なにか特殊な能力があるのではないか？」

「ありません！」

「フム…魔法に関してか？」

「え？どついう意味ですか？」

「たとえば魔力がすごく高くて攻撃力が莫大な力…とか？」

ありそう…でも、魔法が無い所から来たのに、そんなことあるのかな？

「さあ…でも、魔法には興味がありますね…」

「ふむ、そういえば君の名前は？」

「えと…『かんばつていせい蒲原零斗』です」

「長いな…よし、君の名前は今日からカイだ」

カイ…蒲原のカと零斗のイか？もし違うなら貝…嫌だな…でもそんなことは無いだろう。なにかあるのかもしれないし…

「カイ？…まあいいですけど…」

「よし、カイくん、まず君に魔法を教えよう、すぐ覚えられる初級魔法を教えてあげよう」

「あ、ありがとうございます！…でも今からじゃないですよね？」

流石にこんな真つ暗な中では練習したくない。

「もちろんだ。ここにとまっていくといい…そうだ、明日起きたら孫を紹介しよう」

「お孫さんがいるんですか…一応名前を教えてください」

「わしの名前は『フランクリ』じゃが？」

「フランクリさん…じゃなくて、お孫さんの方の名前を…」

「ああ、名前は『ロミ』じゃ、仲良くしてくれよ？」

一章 第一話 マトウー？なにそれおいしいの？（後書き）

はい、ロミちゃん登場です、フランクリ？紙マリオRPGにでてきます。パクってますみません…

第二話 え？不審者？人違いです。

「この部屋には誰もいないので、ここで今晚は寝てください。（ククツツ！）」

つとまって連れてこられたのは、結構豪華そうな部屋…
なんか最後に笑い声が聞こえたけれど…まいつか。

「それではおやすみなさい。」

「おやすみなさい」

「はあ…なんなんだよ…たく…」

いきなり神様に召喚されて、いきなり魔獣を倒せとか…無理に決まってるだろ…そんなことを考えながら、とりあえず用意された部屋に到着したカイはすぐにベットに寝るつもりだった。が…

ドサツ！「ふみゃ！？」「え？」

ただいま大変気まずい空気になっております。

今、何が起こっているかというと、フランクリにつれてこられた

部屋が、実はその孫の部屋で…何も知らない僕が、ベッドで横になろうとしたら…ロミがいたというわけです。

あのジジイ…図ったな…

「とりあえず、不審者じゃないって!」

「ウソだ!寝ている女の子の上いきなりのつかってくるなんて、私を襲おうとしたんだ!」

「ウツ!…フランクリさんがここには誰もいないから寝ていいぞっていつてくれたんだが…ハッ!最後のあの笑いはこれだったのか!」

「とりあえず、不審者じゃないって証拠をみせてよ!話はそれから聞くよ!」

証拠…そんなものないよ…自分が勇者だって証拠しかないs…あ、そっか、勇者に不審者はいないか…

「じゃあ、証拠を見せたいから明かりをつけてよ。」

そういうと、ロミは仕方なさそうに立って言う。

「明かり…はい、これでいい?…って…黒髪黒目…!?ま、まさか、勇者さん!?!」

「これでわかってくれた?僕が不審者じゃないって」

「…わかったよ、とても変態な勇者だっということが」

「な!?!だからフランクリさんがこの部屋には誰もいないので、こ

ここで寝てください。っていったんだぞ！？僕はだまされたんだよ
「！」

「じゃあ、フラン爺にきいてみるもん！」

そういつとロミは、いきなりドアを開けた。

その後、すぐに勢い良くドアをあけて部屋に戻ってきて「すみませんでした・・・」といきなり言ってきた。

「わかってくれた？」

「うん…ごめんなさい」

「まあ、不審者じゃないってわかってよかったですよ…もしもこのままずっと不審者だって言われ続けるのはイヤだもん。」

「…本当にごめんなさい…」

「もう謝らなくていいよ、僕だってこんなことがあったら不審者だって疑うもん…ところで、本当の僕の部屋はどこかきいた？」

あのジジイのことだからな…用意してないとかは無いやな？

「…ここのもう一個上の階、一番奥の部屋だよ」

よかった…

「ありがとう、では僕ハ名前は何？」

「え？」

「あなたの名前は？」

「僕の名前？僕は蒲b…カイです」

「カイさん…わかった、ありがとう」

「うん、ではお休み」

「おやすみなさい」

はあ…無駄に疲れたなあ…なんで僕が勇者なんだ…たしかに勇者とかにはあこがれてたよ？いつかなりたいて、でもなんで本当に勇者にならなきゃいけないんだ…それに、いきなり魔物を倒すだど？無理にきまつてる…

あーでも魔法には興味ある…かな…ゲームみたいに変身したり、召喚したり、なにもないところから火とか水をだすとかおもしろそうだなあ。

そんなことを考えながらカイはいつのまにか寝息をたてていた

第二話 え？不審者？人違いです。（後書き）

guretoです、短いのなら毎日かけそうだなーと思い、ものすごく短い小説になってます。ハイ、忙しいときとか、疲れてるときはかけませんが、よろしくお願いします。

第三話 隠し部屋！？そんなもんあるの！？（前書き）

さっそくサボってしまった…ごめんなさい。

第三話 隠し部屋！？そんなもんあるの！？

- 朝 -

「ん…朝か…」

とりあえずトイレにいき、そのあと部活のための準備をしようとおもった…が

「あれ？…ここはどこ？…あ」

思い出した。…異界に飛ばされたんだっけ、あっちの家族はどうしてるのかなあ…

（答えます。まず、あなたが生まれたことから、キレイさっぱり忘れられていますね）

「うお！？…ああ…神様か」

いきなり頭の中から声をかけられたのでビックリする。

（そうです。私が記憶削除をしたために、すべて忘れられています）

「…そう……」

（すみません…勝手に呼び出してこんなことになってしまっ…）

「…フランクリさんがあんたのこと知ってたけど、もしかしてこの世界で有名なのか？」

(ええ、かつてこの世界で、大規模な戦争がおきまして…その戦争をとめたのが私なんです)

「なるほど、世界の破滅をとめたっていうことで有名ってことか」

(そうです)

「ふーむ…とめたっていうことは、実体化とかできるのか？」

(いや、残念ですが…私がどう止めたかというと、水魔法で水の壁をつくり、それを氷魔法で凍らせたんです。とっぜん結界ができたため、兵士たちはあわてて逃げて、終戦とな…り…ま…した)

「時間切れか…あれ、1分たったか？…まあいいや」

とりあえず、下りて飯を食いにいくとするか…ということでもずはトイレ…あ、どこだろう。それ聞かなきゃ…

・フランクリの部屋・

「そういえば伝えてなかったのぉ」

「で、どこですか？」

「…どこじゃったかのぉ？」

いい加減ふざけていると殴りたくなってくる。

「おい爺さん!!?」

「冗談じゃ、わしの部屋の部屋を出てすぐ前じゃ」

「了解…」

フー…やっぱり出すものは出さなきゃなあ…よし、出した後は食わねば!飯だ飯!どんなものが出るのか楽しみだなあ…

・リビング・

フランクリの部屋に戻ると、フランクリがいきなり手招きして、ついて行くと、いきどまり。しばらくあきれっていると…いきなり隠し扉が…

「こんな部屋あったんだ…」

「見てないだけじゃ、ほかにもいろいろな隠し部屋がある」

そう、リビングはなぜか隠し部屋である

隠し部屋の割には意外と広く、落ち着ける部屋である。

「なんで隠し部屋なんてつくるんだよ!?!」

「強盗とかきたとき安心じゃろ?」

「ああ…なるほどね…でも…部屋の場所忘れてらどつすんだ？まあないだろうけどさ…」

「そのときのために、案内図があ」「そんなもんつくってたら結局ばれるだろ！」

「家のものにしかわからないようにしてあるんじゃ」

「ああ…それなら大丈夫か…」

「見せてあげようか？」

「いいんですか？簡単に見せて」

「ああ、勇者に悪いやつはいないからのう。えーっと…ホレ」

「…？…なんか見えてきた…うわ！なんだこれ！7部屋ぐらい隠し部屋があるじゃん！」

「7部屋じゃない、8部屋じゃ」

「かわらねえ！多すぎだろ！」

「どこにいてもすぐ隠れられるようにしてるのじゃ」

「なるほどねえ…隠し部屋にはなにがあるんだ？」

「こんな感じの部屋とか、取られちゃいけないものとかもある」

「へー…そついでよ…」

「なんじゃ？」

「腹減った」

第三話 隠し部屋！？そんなもんあるの！？（後書き）

カイ「暗いって作者にいわれた・・・しょうがないじゃん！いきなり異世界にトリップしたんだもん！」

作者「さつさとなれろ、書きにくい」

カイ「慣れたくないよ！お前が代われよ！」

作者「カイ、お前頭いいの？」

カイ「スルーされた！？」

作者「あくたくまゝいいのか？」

カイ「えつと…オール3です…」

作者「…そこまで作者と同じなのか？」

カイ「ええ！？まさかの一緒！？」

作者「…悪かったな」

カントンにばらしたけどだいじょうぶか？

第四話 ……「わ、日本と同じじゃね？」（前書き）

ついにフランクリのことをジジイと呼びます

第四話 ……これ日本と同じじゃね？

「腹減った」

「そういえば飯をくわなければのお」

飯を食うの忘れてた……ってわけじゃないけど、とりあえずおなかせいた

「準備するから、ロミを起こしてくれ」

……ロミという単語で思い出した。

「ああ……つか爺さん、昨日の夜のこと、謝ってくれないか？」

「え？なんのことじゃ？」

「とぼけるな、完璧にロミの部屋を案内してたじゃねえか」

「ああ、すまぬのう。年だからまちg」間違えるわけないだろ！？、俺は変態扱いだったんだぞ！？ちゃんと謝れ！」

「……「じめんなぞい」」

まったく……こいつは絶対に自分が楽しければいいっていう考え方だよな……マジでこいついうやつは好きになれない……

とりあえずロミを起こしにいくか……

「じゃあロミを起こしてきます」

「おう、変なことす」「くたばれジジイ」

とりあえず下ネタいうじじいはいおいといて、起こしにいきますか…

「変態とまちがわれないようn」「それはテメエだ」

おいといたのにまた言いやがった、今度いったら殴るか…

「じゃあ不審者とm」「死ね」

ドカ！

殴りました、死にましたじゃこまるので、とりあえずやさしく殴りましたとさ

「じゃあ改めていってきます」

「おう逝って」「お前が逝け」

ドカ

ッ！

とりあえずさっきよりも勢いをつけて殴ったので、たぶん30秒は動けないと思うよ。だって殴ったところ鳩尾だしね

・ロミの部屋・

ノックしないと不審者に思われるかな…とか思いつつ、とりあえずノック無しでドアを開ける

ガチャ

「朝ですけど…」

「ん…誰…フラン爺?…」

「カイですけど」

「ああ…へん…勇者さんか」

こいつ絶対変態って言おうとしたな…変態はジジイなのに…

「で?…なに?…」

「起こしにきました」

「ああ…もう5分待ってて…いくから…」

「了解」

とりあえずジジイに報告するか…

- リビング -

あ、まだ倒れてる…といっても呼吸してるし、だいじょうぶだろう…とりあえずスルーして水を飲もう

さっき、ジジイが水を出しているのをみてたので、適当にマネし

てみると、水が出てきた。あ、コップないや。

「おい！わしは無視か！？」

「だまれジジイ、変態に用はねえ…あ、最後にひとつ、ロミはあと5分したらくるってさ」

「最後だと…？なにが最後なんじゃ？」

「てめえの人生がだ」

ドカッ

！ボカツ！ヒュー ドサッ！

あー…蹴ったら空とんでおっこちた

まあどうでもいいけどね

5分後

「おはよう…」

「おはようございます」

「あれ？疲れてるのかな、変な物体が見えるよ」

「んーあの変態の洗濯物？あれはあまりにも変態だから近づかないほうがいいよ」

「ちょっとまで、わしは洗濯物じゃないし、変態じゃないぞ」

「ふうんそうなんだ、じゃああとで雑巾にしてトイレでも洗つようにしよっか」

「それがいいと思うよ」

「ちょっとまってくれ、わしは君たちの何なんだ？」

まずは二人で顔をみあわせる。そのあとは息を吸い

『変態の洗濯物』

「おまえらひどいんじゃないか!？」

なにこのハモりは

さらに10分後

「ご飯できたよ…」

変態の洗濯物は料理ができるらしい。器用な洗濯物だ

「…なにこのご飯」

「なについてお米と味噌汁とシヤケだけど」

「…」じつじつところは日本と同じなのか…」

「ん？勇者って森の石から生まれるんじゃないの？」

「森の石？」

「ストーンヘンジのことじゃ、とりあえず、そこから勇者がでてきて、試験にあわされえ、それに耐えたものは勇者となるんじゃない」

「試験…そういえばなんかドラゴンがいたなあ…」

「ドラゴンじゃと！？そんなものはこちら辺にはいないぞ！」

「…ねえ、そのドラゴン何色だったの？」

「うん…暗かったし、逃げるのに必死だったから覚えてないんだ。でも大きさは覚えてるかな…たしか僕の10倍はでかかったと思う」

「…」

「あらら…大変だったんだね」

「うん…しかも元の世界には戻れないみたいなんだ」

「え！？それってレミ様のミス!？」

「らしいんだ…」

「へえ…ずっとこの世界で暮らさなきゃいけないのか」

「そうなんだよ…」

そんなことを話しているうちに、飯はなくなった

とりあえず魔法をジジイが教えてくれるらしい

ジジイはあの殴る力があれば魔法なんて必要ないとかほざいてたけどね…

魔法教えてもらうんだから、やっぱり先生ってよぶか…フランクリ先生か…キモいな、やめておこつ

第四話 ……これ日本と同じじゃね？(後書き)

カイ「あのジジイとか死ねばいいのに」

作者「変態はきえればいいのにな」

フランクリ「変態変態言うな！」

カイ「じゃあジジイの変態？w」

作者「いいねwそれw w w」

フランクリ「変態けしてくれええええええええええ」

悲しいフランクリなのでした

フランクリ「悲しいって…ひどいな」

ロミ「本当のことだもん、しょうがないよ」

カイ「ロミ、いつもこいつはこうなの？」

ロミ「うん、女の子の前で下ネタいたり、今でも」「ロミへお風呂
にいつしよにはいる？」とかいつてるしね」

カイ「つけたす、ロリコン変態ジジイでおkだね」

ロミ「いいねw w w」

フランクリ「わしの扱いひどくなった!？」

悲しいフランクリなのでした(2回目)

第五話 魔法？結構簡単だね（前書き）

なんとか気力でできた…

第五話 魔法？結構簡単だね

さっそく、魔法を教えてもらおうと思ったら、まずマナの最大値、魔力の高さをしらべるとか言って、ジジイは物置で測定器をさがしている。ロミもその手伝いだ。で、俺はを言つと…

「これがいいかな…」

武器探しである。さすがに、防具などはおいてないが、武器は多種多様にある。

ちなみに、今いる所は物置ではなく、武器庫である。何でそんなものがあるのか、とロミに聞くと。

「あたりまえじゃん！魔物とかでてくる世界なんだから」と、笑いながら言われた…

武器については、なぜこんなにフランクリが持つてるのかが謎である。気にしないことにしておくけれどさ…

「短剣…リーチがせまいか…お、長剣だ…重っ！軽いのがいいな…」

いろいろな武器を振ったりしているがなかなかあつものがない

「これは…刀！？そんなもんまであるのか！」

刀までおいてあるとかすごいな…お？なんだこれは

「…グラディウス？剣の名前か？」

振ってみるとちょうどいいしリーチもまあまあだ

「これがいいな…でも二刀流にするとあぶなさそうだし、盾もあつたほうがいいかな…お、これがいいな」

カイトシールドとかかれた盾だ。これもたぶん名前だろう

「よし、これでおkだな…ジジイに報告しよ…弓か…」

弓も置いてあつた。どんだけ日本に近いんだって感じだな

「へーいろいろあるんだなー和弓もあるし…ボウガンもある」

目に付いたボウガンを装備してみると、こいつも体にとてもあつている

「よし、これももらつていこう!」

瞬間
武器選びは終了した。あとは魔法を習得するのみだっ!と思った

「カイくん!ワシじゃ!ワシじゃよお!」

変態ロリコンジジイ参上したな、ついでにロミもいる

「いま変態ジジイがきたって思っただろう!」

「思つてない、変態ロリコンジジイとかわいい子がきたって思った」

「わしの扱いひd」カイさん…」

「ちょ、ロミ、抱きつかないでく」かわいいだなんて…」

「いいなーカイくん…今だけ変わってよ」だまれジジイ、変態にはかわいい子もブスな子も寄り付かないんだよ。ねーロミちゃん」

「ねー」

「二人に嫌われた!？」

とりあえず抱きつくロミをおろして

『それは前からだよ』

「!？」

だからなにこのハモリ…

・リビング・

ジジイが泣いてます、ショックだったんだと思うよ。本当のこと
いっただけなのにね…

「ねー魔法の訓練は？」

「ジジイはそんなことできません…」

「ロミ、どしてよじか

「脅す?」

「そうしよつか」

「わしはもうどうでもいいよ」おいジジイ、教える。教えないとグレディウスで頸動脈を斬るぞ」

「それと、後ろからも後頭部に矢が直撃するように、ボウガンで狙ってまゝす。」

「わかった！教えるからやめてくれ！」

【そうか！ジジイは脅せばいいのか！】

二人で思ったことはそれだけだ

「ねー私にも武器ちょうだい」

「いやじゃ！わしの宝が減ること……ヒッ！わかった、武器あげから、ボウガンで狙うのやめて！」

「んーじゃあ僕にも回復薬とかちょうだい！」

「あるけど、絶対……わ、わかりました」

お、ほしいものは手に入ったな

「そういえばロミは魔法つかえるの？」

「うん。だからカイさんと一緒に魔法を教えてもらうことにする」

「なるほど…同じスタートか、どっちが早く覚えられるか競争だ！」

「受けてたつわ！」

ジジイに教えてもらうのは嫌だが、しょうがない…

「さて、んじゃ、この本を熟読するんじゃ。そうすれば魔法のことも良くわかるぞ。」

…え？

「ちょっとまってジジイ、お前が教えるんじゃないのか。」

「ワシにそんな知識はありませんよーだ」

子供かよ…よーだって…って！

「本読むだけで覚えられるのかよ！」

5時間後

「やった！使えた！」

「うわっ！火！？ファイか！ちくしょー！負けた！」

ロミは基礎知識はあったんだもんな…そこが敗因だ…

とりあえず、本を読んでわかったことは

この世界には魔法の属性が8つあること、それらは、火、水、雷、土、氷、光、風、闇で、ひとつの属性に、約5つほど技があるらしい。また、テレパシーとか言語とか、そういうものは、属性を組み合わせて使うという。

レミのたてた防壁は水と氷だが、ほかに土と火で、火の防壁とか、水か氷で防壁をたてたあと、さらに雷魔法で、さわれば感電する防壁など、さまざまな防壁が作れるらしい。攻撃だと、水と雷で雷のダメージがあがったり、光でめくらましをしたあとに、氷でかたんに固めて、雷で感電させる。などさまざまなコンボがある。

ロミがやった魔法は、火の初級魔法ファイだ。そこからファイア、フレイム、フレイマー、フレアとあるらしいが、フレアなどは、才能がある人じゃなければ使えないらしい。

初級魔法や、中級魔法は、念じる強さで、変わる。なれないと、ファイを唱えていたつもりが、ファイアを唱えている事もある。そこまで変わらないが、使うマナを多くしてしまったり、魔法が弱かったり、強かったりしてしまうことがある。

僕はマナ残量、魔力が、人一倍多いと言われた。でも知識がないため、いろいろ勉強している

「はあ…ロミはいいなあ、基礎知識があって」

「そんな事いったら、私だってそのマナと魔力がほしいよ」

「はあ…そういえばそうだったけなあ…」

そんなことを話してたら、いきなりジジイが横から入ってきた。

「これ、話してないでちゃんと勉強しなさい！」

「だまれジジイ、魔法を自分で教えられないのに、先生きどってんじゃねえ…うらっ！」

「へッ!?ゴハッ!…水魔法…ガハ…」

「あ、撃てた」

「おめでとう!カイくん!」

「ありがとうロミ」

「わしはむし!?!」

「そつだ、お前は虫だ」

「じゃなくて無視!?!」

『無視だね』

「先生やめるわ!」

だからこのハモリ!

第五話 魔法？結構簡単だね（後書き）

カイ「文化祭どうだった？」

作者「3位タイでした」

一同「お〜」

カイ「なんていう歌うたったの？」

作者「『輝くために』っていう合唱曲」

ロミ「へ〜…タイってことはもう一個いるの？」

作者「いるけど…どこだかわすれたww」

カイ「wwww」

ロミ「1, 2位はなに歌ったの？」

作者「1位は『虹』ってやつで、2位が…」

カイ「なにになに？」

作者「…輝くためにw」

ロミ「同じ歌に負けたの？wwww」

作者「負けたのwwww」

フランク「なんの話？エー（一同）「死ね！」」

悲しいフランクリなのでした（3回目）

第六話 ジャデツパ？なにそれTHEデツパ？（前書き）

今回はいつもより少しだけ長い

第六話 ジャデツパ？なにそれTHEデツパ？

「先生やめるわ！」

また、子供みたいに泣き出すジジイ…ここは脅すか…

「テメエにやめる権利は…」

「わかった…（グスン）じゃあジャデツパという魔族を狩ってきてくれ、だがやつには水はきかない、雷と、火くらいは覚えておくのじゃ」

しかたない…本気で…

「ん…はっ！」

「！？火と雷の習得を同時に起こすじゃと！？やっぱりこれが勇者の力か！」

「すごーいっ！」

「…はっ！」

『こんどは水も！？』

「…これ疲れます」

「そりゃそうじゃよ、体のいろいろな部分を使うんじゃから…」

水を左手で、火を左手で、雷は腕でおこしているから、さすがにきつい

「…これどうやって消すんですか」

「けしかた教えてなかったな、消えろと念じるだけで簡単にきえるぞ」

「ずいぶん簡単だな…まあいいや…消えろ？こっつ？
そう念じると、マナの流れがとまって…」

「…おー本当だ、簡単に消えた」

「すごいすごいっ！」

「じゃあ、さっそくジャデッパ狩りにいってきていいですか？」

「おう！気をつけていくのじゃよ…あ、場所がわからないか。ロミン案内してあげてくれ」

「えー怖いよ…」

「大丈夫じゃ、勇者もついでるし、さっきもファイがつかえたじゃろ？」

「…わかったよお」

「よし！じゃあザデッパ狩りにいこう！」

「ザデッパ？」

「ん…あ、ジャデツパか」

「確かに言いにくいけどTHEデツパはないだろう」

「すみません…」

「まあ、本当に人型で出っ歯なんだけどね」

「」

「そんな感じ」

「じゃあ改めて…出発！」

5分後 - ティナイル近くの森 -

「ついた！」

「早っ！」

いくらなんでも早すぎるだろうと思いつつ、THE出っ歯を探す。つて、もしかしてあれ？なんか女の幽霊みたいな…うわっ振り向いた…キモっ！

「いたっ！…キモっ！」

「う…わ…キモイ…」

髪の毛を振り乱した出っ歯がゾンビのように歩いてくるのが見える

「気持ち悪っ！…吐き気がしてきた」

「私も…」

とりあえずロミがボウガンで狙い、撃つ…が

「効いてない!?!」

仰け反りもせず、ただ歩いてくる

「なら僕が…」

瞬時にウオタ（水最弱魔法）をつくり、あてる…が

「これもきかない!?!」

さらにエレキ（雷最弱魔法）をあてる…すると

「グ…ガア…!」

「…!!多分しびれているんだと思う!」

「そうか!ウオタで水をあてたから、余計に痺れてるんだ!」

なら痺れてる間に…

「ロミ！二人でファイを唱えるよ！」

「了解っ！」

二人で唱えれば、よりその魔法が強くなる。違う属性なら、合体魔法という2種類の魔法をあわせた攻撃ができるらしい。これ、さっきの本で見た…やっぱ詳しく書いてあるとわかりやすいね！

「いくよ！」

「OK！」

一気に攻撃…だが俺が撃つたのは…

「フレイム！？中級魔法じゃん！」

「…え？あ、本当だ」

自分でもビツクリした。いきなりそんな中級魔法が使えるとは…そんなことを思っている…

(ドゴオオオオオオオオオオ)

「あ…」

クリティカルヒットであたったファイとフレイムは、ジャデツパを焼き尽くし…まわりの草木も巻き込み消えた

「あーあ…まわりの草ももえちゃったよ」

「大丈夫！ティナイルのそばの森には、数え切れないほどの草木があるから！」

よかった、これで貴重な木をよくも！と怒られたらちょっとヤバかったな…そんなことを考えてたら

「…なんか変な音きこえない？」

「ん？そんな音きこえ…」本当だ、きこえる、なんだろう」

大地が揺れるような音が…いや、実際にゆれているかもしれない

「だんだん近くなってくる…！！？」

現れたのは…

『クマ！？』

体長3Mはあるヒグマが目の前に現れた

「こ、こんなの倒せないよ…」

「逃げるしかない！幸いにも村は近い！」

「で、でも村は人が…」

「クッ！…」

ここで倒さなければ、村の人も襲われるし、自分たちも殺される

「逃げることもできないのか…！」

逃げれば村の人が襲われる、森に誘導しても、逆に俺たちが迷子になってしまう

「戦うことしかないわ！私たちが村を守りましょ！」

「それしかないか！」

ロミはボウガンを構え、僕は剣と盾を持つ。ロミは火も同時に唱えている

「雷魔法を撃つ！ロミは離れていて！」

「わかったわ！」

瞬時にマナをあつめ、雷をイメージする。

「…つらあつ…！」

僕の放った魔法はエレキではなかった

「…サンダー！？」

雷魔法には4個種類がある、最弱魔法はエレキ、2番目はエレキテル、3番目がライで、4番目がサンダー、つまり上級魔法を放つことができたのだ。上級魔法を放つことができるひとは村で一人いるかいないか。それをカイは一日で取得してしまった

「すごい…上級魔法なんて初めて見た…」

「自分でもビツクリだよ…」

カイが放ったサンダーは上空から一気に落ちて腹黒ヒグマに直撃、そのまま腹黒ヒグマは死んだ。腹黒ヒグマとは、腹黒なヒグマではなく、本当にお腹が黒いため、腹黒ヒグマとカイが名づけた

「これは報告だね」

上級魔法を見たロミは嬉しそうに言った

・フランクリの家・

ジジイは、ロミから、起こったことすべてを聞いて、驚いていた。

「なに！？上級魔法のサンダーが撃てたじゃと!?!」

「そうなんですよ虫さん」

「わしは虫じゃない」

「ウソだあ…」「またまたご冗談を」

「おまえらひどすぎるって!」

「それでねえ、腹が黒いヒグマにあてたら一発で死んじゃったんだよね」

「腹が黒いヒグマ…それは確か、黒ではなく黒が混じった赤、つまり血の色が腹についているということだ、」
「ブラッディベア」と呼ばれているクマじゃな」

「へー虫は物知りなんだねー」

「ねー」

「虫じゃない！人間だ！」

『へー』

「軽く無視！？」

「そう、軽い虫、というかゴキブリ？」

「生命力すごいよねー、あれ」

「たたいただけじゃ死なないもんね、ほら」

とりあえず頑張って土魔法をつかい、さらに氷で固めてそれをジジイの頭に落とす

「グギヤ！？」

「カイくん…なんか土と氷もつかえていますけど？」

「頑張りました」

「わしはスルー…か」

あ、倒れた

「倒れちゃったね」

「どごしよつか」

「とりあえずこのままでOK?」

「いいよー放っておこう」

「わしはかなしひ…ガク」

あ、最後に気絶した

第六話 ジャデッパ？なにそれTHEデッパ？（後書き）

カイ「THEデッパはキモかった…」

作者「ジャ…なんでもない」

カイ「ジャ？」

作者「なんでもないです」

カイ「変な人」

作者「変な人はこいつです」

フラ「ひでえ！しかもわしの名前略されてるし！」

作者「いいじゃないか」

カイ「いいじゃねえか」

フラ「よくないわ！」

ロミ「変態ロリコンジジイは略されるのが普通だよねー」

作、カ「ねー」

フラ「おまえらウザいんだよ！」

全員「それはお前だ！」

フラ「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアア！」

カイは サンダー を となえた

ロミは ボウガン を かまえた

作者は グラディウス を カイ から、貸してもらい かまえた

カイは サンダー を 撃った

ロミは ボウガン で 撃った

作者は グラディウス を 振った

フランクリ は 1452ダメージ を つけた！

フランクリ は 倒れた！

悲しいフランクリ

第七話 剣技なんて使えm…使えた！（前書き）

技名はクラスが同じの友達に考えてもらいました

第七話 剣技なんて使えm…使えた！

ジジイが気絶した後、ロミを家に置いておき、ジャデツパがいる森で修行をすることにした。つかえてない光、風、闇魔法を習得するためだ…が

「これは…やばいな」

ジャデツパの大群に囲まれたのである。およそ1000体はいるだろう

「ここは…本気で魔法を連発するしかないか…」

まず周囲のmanaをあつめ、それぞれの形に変えていく。右手でフレア、左手でスプラッシュ（水最強魔法）、右足でサンダー、左足でフリーズ（氷最強魔法）、両腕でクエイク（土最強魔法）を唱えていき合体させる。そして1000体のうちの1体が攻撃を仕掛けようとしたときに一気に発動させる。

なんか変な色の物体になってたけどまあいいや。とりあえず撃つてみると火が右から、水が左から、上空から雷が、真ん中から、氷が、地面から地震がでた…すげえ強い気がする…逃げ場がない気がするが…しかし…なぜか100体ほど残っていた…生命力が異常と…いうことがよくわかった。とりあえず、のこりの100体のために周囲のmanaを集めようとしたが…manaがなく、フレアしかできなかった…が100体のジャデツパが一斉に攻撃してきて…

「うわっ！」

ジャデツパが突進してきた。というか、突進とリアットをあわせたような感じだ、それが100体同時だ。しかも…

「き、気持ち悪い…」

ゾンビのように、髪をふり乱した出っ歯が、ドスドスと音を立てて、しかも手をちよつとあげてペンギンが歩く時のような感じで突進してくる、しかもドス黒い笑顔でだ。あれは気持ち悪い、ジジイでもあれは気持ち悪くなると思う。

「グハッ！」

油断して攻撃を食らったが、攻撃はそこまでいたくなかった、しかし

「…ん？毒？…」

体の底から体力が減っていく感じが自分でもわかる。しかも、体力だけではない、ありとあらゆる力が抜けていく。ただの毒ではない、猛毒である。

「ガ…ハ…」

意識も消えかけた…そこで、ジジイがくれた、解毒薬があることに気がついた

「ん…ゴホッ、ゴホッ…ぷはあ…死ぬかと思った…」

あのときジジイを脅して薬を持ってなかったらたぶん死んでいたと思う。

「ク…あいつにはこんな特性もあるのかよ…はっ！」

ジジイに感謝しながら、マナを集め、形にする。フレアはマナがなく、使えなかったが、いや、フレイマーも使えないが、とりあえず、フレイムで対応することにした

「グギヤア！」 「ゴギヤア!？」 「フギヤア!？」

とりあえず残り10体位になった…が自分のマナでは、最弱魔法か、その一つ上の魔法しか使えなくなっていた。

「これはまずいな…ここは…」

- 剣をつかうしかない! -

剣についても魔法を知るときに少しは知ることが出来た、剣は壹いちのとうの刀、貳にのとうの刀、参さんとうの刀、四よんのとうの刀そして最後に伍ごのとうの刀がある、だいたいい一個の刀に、技は5、6個ある。それくらいしかわからないが、その本には壹の刀だけは載せられていた。だから

剣の技は壹の刀だけは使えるということ

「10体いるってことは…範囲が大きいのがいいな…」

まずはアサルトチャージで力をためる、次に範囲が大きい技、ビ

「トラツシユを使う、ビートラツシユとは剣を縦横斜めに振りまくり、剣の波動で攻撃する技だ。これなら敵のそばに行かずに、楽に攻撃が出来る。」

「うらあっ…」

適当にグラディウスを振り、その波動でダメージをあたえていく。はっきり言うとこんなことは剣の達人じゃないとできないが、アサルトチャージで少量のマナで力をためているため、そこまで難しいことではない。そして…

「グガア!」「グギヤ!」「ガ　ギヤ!?!」

などと奇声を上げながらジャデツパは倒れていった…もちろん一匹残さずに

第七話 剣技なんて使えm…使えた！（後書き）

カイ「技名とか自分で考えろよ」

作者「いや、話したらやつてくれてさ」

カイ「へー学校で話してるんですか」

作者「ほかにもいろいろな人に言ったよ。悪い？」

カイ「悪いよ！僕のがひろがるじゃないか！」

作者「ジジイが気持ち悪いことも広がるだろ？」

カイ「それはそうだねwww」

フラ「お願い！広めないで！」

ロミ「別に広めてもだいじょうぶよ、むしろロリコン変態ジジイのことを世界中にひろめないと！」

フラ「だれかこいつを止めて!？」

全員「だれかこいつを殺して!？」

フラ「!？」

悲s(ry

第八話 ジャデツパの親玉（前書き）

月曜日の分までなんとか書き終えた…

第八話 ジャデツパの親玉

「はあ…やばいな…こんなにジャデツパがでるなんて思ってなかったよ…」

ジャデツパ1000体を狩り終わり、森の中で一休みするカイは一人ため息をつきながら言った

「まずマナを回復しないといけないしなあ」

マナは最弱魔法は4消費、次は8、次が25、さらに次は50、さらに80、水属性だけ6番目もあり、消費マナは90だ、カイのマナの量は約500、さすがに最強魔法を連発すると、火、水、雷、氷、土だけでも、380消費（雷魔法の最大はサンダーで消費が50）する。回復には最低でも3時間半はかかる

「使えてもマナがなあ…」

才能がある人は1000とか1500まで上限はあるが、これは特例で、普通の人には200くらいである。普通の人から見ると500も多いほどなのだ。

「よし…そろそろいくか…」

いきなり上級魔法を使うのではなく、まずは最弱魔法を使えるようにすることにした。

「よし…じゃああのジャデツパに…風属性ウィンドを…」

最強魔法は自分で持っているのはきついが、最弱魔法は指一本で簡単にもてる

「まあ…簡単に使えるようになるのもおかしいんだけどね…」

つぶやきながらウィンドをつくり放つ

「グギヤア！」

100Mほど離れたジャデツパに見事命中した…が、さすがにそこまで離れていると、威力は弱いので、まだ生きている

「うへ…次は光魔法…ライト」

これまた指一本でライトをつくる、攻撃能力は低いが、相手の視力を閃光で奪うことができる。

「じゃあ…キモいやつは死んでもらいましょうか…」

「グギヤア!?!」

ジャデツパは致命傷にはなっていないが、視界はうばえたようだ

「じゃあ最後に…ブラック」

闇属性は4種類しかないが、少ない消費マナで強い攻撃を毒つきで攻撃する

「じゃあまた指一本で…うらあ！」

「ガ…ギャ…グ…」

いつのまにかジャデツパが近づいてきていたが、楽に殺すことができた

「キモチわるいやつは殺しまくらないとね…」

全属性魔法をつかえた後は、剣技けんぎを使えるかどうかを見る。剣技はまだ壺いぢの刀とうしか使えないが、壺の刀は、すべて使っていないので使ってみることにする

「では…一番簡単な技…ブレイクソード」

ブレイクソードはただ単に振るだけであるが、マナを1ほど使い、力を加える技である、マナが100あれば、100回使える技なのである

「グガ！」

「ちっ！さすがに弱いか…次は…！」

「ギャー！」

ジャデツパが鋭いつめでひっかいてきたが、とりあえず盾でガードする。

「チ…」

舌打ちしたように聞こえたが、とりあえず無視して…

「疾風斬」

こちらはマナを3ほど使い、縦に斬る技である。

「ゲギャ!？」

いきなりきた疾風斬に驚いたジャデツパはそのまま縦に斬られ、真つ二つになり死んだ

「ウツ…」

ジャデツパの血をよく見ると赤ではなく緑だった

「これが魔族の証拠なのか…」

自分で納得し、次の技に移る

「最後は…居合い斬り」

近くにいたジャデツパに居合い斬りをあてる。

「ギャ!？グ…ガハ…」

この技はビートラッシュの斜めをなくしたような技で、十字に切りまくる技だ。ビートラッシュは波動だが、この技は実際に斬るので、違うといえば違うが…威力はもちろんこっちのが上だ

「ふう…やっとやりたいことが終わった…」

全属性魔法取得、壱の刀、確認すべてが終わった。とりあえず帰

るか…そう思った瞬間

グ…ガア…!!

「なんだ!？」

グガアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

「!？ジャデツパの親玉か!？」

体長10Mはあるでっかいジャデツパがいきなり現れた。

ヨクモ…ヨクモ我ガ子分ヲ殺シテクレタナ…

しかもしゃべってるし…

「まずは名乗るんだ、話はそれからだ。」

かつこつけちゃった…

我ハジャデツパノ親玉、「ジャネット」ダ

「ジャネット…か…」

変な名前だな…

イイ名前ダロウ、人間ヨ

「いや、キモイ名前だと思ったただけだよ」

グガ…コノ状況でヨクソナ事ガイエルナ

「思ったことを言っただけです。」

ソナ余裕ナドミセナイホウガイイゾ

「てめえのようなキモいやつは二度と見たくないのでね…」

ソレワ我をタオセルトイウコトカ？

「そうなるねえ」

イイ度胸ダ、気ニイッタゾ

「そらどうも」

フ…話ハ終ワリニシヨウ

「いいだろう…いざ尋常に」

勝ブ！！

って、勝算、ないと思うんだけど…

第八話 ジャデツパの親玉（後書き）

カイ「ジャネット…：前言ったのってこれ？」

作者「正解」

ロミ「ジャデツパが10Mって…：家の中からも見えたんですけど…」

作者「大きくしすぎた？」

カイ「大きすぎだよ！」

フラ「え？何？t」

作者「黙れジジイ、下ネタは言っな」

フラ「チツ！」

カイ「作者よ」

作者「なんだ？」

カイ「殺していい？」

作者「そうだなあ…：別にいいけど一瞬で殺したらだめだよ？痛めつけないと」

ロミ「参加していい？」

カイ「どうぞどうぞ」

作者「ついでに俺も」

フラ「ちよつとまで！3対1ってないだろう！」

カイ「お前には下ネタパワーがあるじゃないか」

フラ「そんなパワーいらないし！？」

作者「なら一生下ネタ言っなよ？」

フラ「そんなの無理！」

カイ、ロミ、作者「それなら…：死ね」

カイは ビートラッシュ を繰り出した！

ロミは クロスショット を繰り出した！（ネタバレ）

作者は フランクリの存在を消す を繰り出した！

フランクリは 存在が消えた！
フランクリは 倒れた！

悲しいフランクリでした。

カイ「存在は復活させてあげよう、俺たちがいじれないから」
作者「すまぬ、すぐ復活させる」
フラ「もういっそのことこのままでもいい…ガクッ！」

第九話 ジャネット対カイ

「まずは小手調べ」

ヤッテミロ

壱の刀・ブレイクソード・

瞬時に少量のマナをあつめ、ジャネットのいる方向へ発動させる
…しかし

コンナモンカ？才前ノカハ

「何!？」

奴には微塵も食らっていないようだ…でもこれは切り札ではない

「なら次は!」

闇魔法・ブラック・

闇魔法の中で最弱だが毒もあるので、楽にHPを減らせると思った。しかし

我ニ毒ハキカナイ

「クッ！」

次ハ我ノバンダ

闇魔法 - グラビトン -

「ク…重力魔法か…」

ギリギリ盾で重力がかかるのを防いだつもりだったが少しかかってしまった。

「いきなり闇最強魔法ですか…」

我ノ力ハ才前ノ力では勝テナイ

「そうですかっ！」

重力がかかったまま今度は…

火魔法 - ファイア -

無駄ダ

「どうかな！」

ドゴオオオオオオオオオオ

火魔法の2番目、ファイアでも簡単に倒せないことはわかっている、だから

続、合成魔法・エレキ+ウオタ・

一回じゃ無理なら次は水と雷をまぜて撃つ。これで雷のダメージは大きくなるのでダメージは通る

フ…少しハ効イタナ…

「終わりと思うな…」

さらに連続させて…

壱の刀・ビートラッシュ・ 続・ウィンド・

波動で斬る技にウィンドを縫わせれば簡単にダメージがあがる。
むらじ…

壱の刀・アサルトチャージ・ 続・疾風斬・

これだけ連続させれば倒せる、そうおもったが…

フ：技ヲ連発スルダケデモカテナイナ

「これで生きているとかどんだけ化け物なんだよ……」

次ワ我ノコンボダ

- ファイ+ウオタ+エレキ -

「フン：盾で簡単にガードできるぜ」

甘いな

- クエイク -

クエイクは土最強魔法で、地震を起こす技だ、盾を前に構えてちや簡単にはよけれないと思ったのだろう、しかし

「甘いのはそつちだ！」

- 氷魔法、アイス+ストーン -

アイスで土を凍らせてその上にいそいで飛び乗り、ジャネットよりも高いところに移動する、そして…

・エレキ・

雷をジャネットに向かって撃つ…すると当然上からなので頭に直撃する

ゲガ…

さすがに効いたようなので、さらにここから

・ビートラッシュユ+ウインド・

ここで頭を狙い撃てば簡単だと思い、風を縫わせた波動を作り、撃つが、今度はよけられた。しかも、もう足場がくずれそうなので、急いで足場をつくろうとした…が

「マナがない!?!」

マナがなければ魔法は使えない。そうして近くにあった足場に乗りうつとした…が、それはジャネットだった。つかクサイです…いきなり飛び乗ってきたカイン、ジャネットは対応できずにそのまま…

「ハッ!」

ゲガア!?

第九話 ジャネット対カイ（後書き）

カイ「キモかったぜ」

作者「おつかれさま」

ロミ「乙〜」

カイ「ジジイはキモイ奴が似合いそうだよな」

フラ「やめて！わしは結婚してるんじゃない！」

ロミ「おばあちゃんって、合コンとかで余りものだったらしいよ」

フラ「やめて！いわないでくれ！」

カイ「へー…そういう奴とじゃないと結婚できないよね〜…」

作者「そらそうだな…」

フラ「納得しないで！」

ロミ「生まれた子供はとて美人、フラン爺はとて喜んでらしいよ…」

フラ「生まれた子が美人ってのはよろこんでもいいじゃろ！」

カイ「なるほど…それで夫が変態だってわかったおばあちゃんは逃げたんだな」

フラ「!?!」

悲s（カイ「もういつものことだから悲しいフラ（ry）なんて言わなくてよくな〜」

作者「そうだねー」

フラ「いつものこと…と…ウワァー…」

ロミ「あ、逃げた」

第十話 お祝い？え？僕中心？（前書き）

カイ君が緊張します

「…何か悪い事した？」

「逆だよ逆！何簡単にこのあたりの魔族すべて倒しちゃってんの！」

「え……全部？」

「ジャデツパのことか？…」

「そつだよ！今村で大騒ぎになってるんだよ！」

「…もしかしてジジイが倒してくれって言ってた奴って」

「きつとジャネットのことだよ！」

「…マジ？」

「マジだよ！とりあえず村の広場に来て！みんな集まってるんだから！」

「あ、ああ……」

まさか昨日の夜言われた事を次の日にやっちゃうなんて…どうせ倒せないだろうなって思ったのになあ…

さすがに自分の命がかかるとできちゃうもんなんだ…と実感した。

・テイナイル村の広場・

現在、ティナイルのほぼ中心にある、広場につれてこられています。すでに広場にはたくさんの人が集まっていて、ステージのようなものまで作ってある。…いつ作ったんだよ。

「どこ？」

ロミに聞いてみる。

「そうそう、あそこのステージ裏にいてくださいって言ってたよ」

「わかった、ありがとう」

- ステージ裏 -

ステージ裏には、マイクみたいな物とかがおいてあり、体育館のステージみたいな感じになっている。そして、コードの配線とかを色々と直しているスタッフさん達が沢山いる。俺はどうすればいいの…？

悩んでいると、一人の男が近づいてくる。

「おお！勇者様！やっとこられましたか。ささ、こちらの席に座って待っていてください」

「あ、はい…」

こういふ場所本当は苦手なんだよな…文化祭で歌を歌うときなどは、よくあがつちゃって歌えなくなってたよな…。昔のことを思い出していると、聞き慣れた声が聞こえた。

「えー村長のフランクリです。皆さんにあつまってもらったのは皆知ってるとおり、昨日この村に現れた勇者が、さっそくジャデッパのボスジャネットを倒したそうです！」

『うわあああああああああ！！！』

「ジジイ！？あいつ村長だったの！？」

というか、人数多すぎでしょう…叫び声みたいになってるし…

「その勇者は、たった今この会場にいます！ではどうぞ！登場してください！」

『うわあああああああああ！！！』

「これ…やばくね？」

戸惑っていると、さっきの男が話しかけてきた。

「ではどうぞ、足元に気をつけながらステージへお上がりください」

「あ…はい…」

とりあえずステージに上がってみると…そこには村人全員、たぶん100人くらいがいた

「こちらがジャネットを倒したカイです！」

『うわあああああああああ！！！』

「ああああ……！」

「さ、カイ君、スピーチよろしく」

「何で僕が……うう………わかりましたよ……」

「仕方ない……と思いつつ……」

「えっと……ジャネットを倒したカイです……こういつところでは話するのは苦手なのでうまく話せませんが、とりあえずここまで盛大に祝っていたにありがとうございます……！」

「まあ、祝ってはないけれどね」

「これからよろしくおねがいます……」

『うわああああああああああああああああああああああああああああああああ……』
「ああああ……！」

「ちょっと、叫び声にしか聞こえないんですけれど……」

「さあ！勇者に拍手を……！」

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ……

・ フランクリの家 ・

「拍手が10秒ぐらい続いたけれど、そこまですごいことやったの

「かあ」

「まだわかっていないのか、ジャネットといえば八大魔族の中の人じゃぞ？」

八大魔族って何？おいしいの？悩んでいる僕を見てロミが言う。

「フラン爺…異世界から来たのにそんなのわかるわけないじゃん」

いいこと言ったロミ！えらいぞ！

「それもそうなのう…八大魔族というのは、簡単に言えば魔族のボスのことじゃ」

「魔族のボス？」

「そうじゃ、ジャデツパのボスはジャネット…と、ある魔族にはボスがいるんじゃ」

「へー八大ってことは8匹ボスがいるの？」

「そうじゃ。まあ勇者にジャネットは倒されたから今は7匹なのじやがな」

「…そこまで大きいことをやってしまったのか…」

「わかったかの？」

「完璧にわかりました」

「ウム、じゃあついでに性教いk」「死ぬジジイ……!!」

第十話 お祝い？え？僕中心？（後書き）

カイ「ああ…疲れたよお…」

作者「乙（2回目）」

ロミ「おつかれさま」

フラ「おつかれー」

カイ「ジジイめ、よくもあんな場を設けやがったな！」

フラ「まあそう怒るな」

カイ「死ね」

氷最強魔法 - フリーズ -

フラ「!？」

カキン

カイ「このままにしておこうか」

ロミ「そうだねー」

作者「そうしよう!」

フラ「……………」

第十一話 勇者の仕事は魔王を倒す事(前書き)

カイとジジイがショートコントをしたようです

第十一話 勇者の仕事は魔王を倒す事

とりあえず、下ネタを言うジジイを殴って、元の話に戻そう。

「ロミ、八大魔族の上はいるのか？」

「どゆこと？」

「八大魔族を従えるもの的な感じの」

「あー…本でみたことあるけど…「昔、災いを振りまいた魔女と魔王とその子供はレミ様によって海に追放されたけど、地に、いつか災いを起こすために、八大魔族を作った」という言い伝えが、マトウーでは残っているらしいよ」

「それをたおさないといけないのかなあ…」

(そうです、倒す事が仕事です)

「うあ!？」

またいきなり頭の中に声が響いたので、大声を出してしまう。

「どうしたのカイクン!」

…そりゃー心配するよね…いきなり大声を出すやつがいたら…

「い、いやなんでもない」

(い、いきなりでるのやめてよ…)

(すみません…あ、もう時間ないんで、それでは…)

(あ…)

行ってしまった…まあいいや引き続き…

「ロミ、いまレミからテレパシーがきたんだけど…倒すことが仕事です。っていつてた」

「あー…頑張つてね…」

…え？頑張つて？…流石に期待はしてなかったけれど…？

「まさかの僕一人？」

…ってことは相当大変になりそうだけれど…？

「…私も？」

「…」

「…」

…やっぱり一人で行かないとダメなのかなあ…

「少し考えさせて…」

「…あ、うん…」

僕一人で魔王なんて倒せるはずなんてないし、八大魔族も倒せないと思う。だから仲間はいたほうがいいと思うんだけどなあ…やっぱロールプレイングゲーム RPG みたいにはいかないなあ…

「グホツ！ゲホツ！…あー…死ぬかと思った…」

「性 育などという卑猥なことは二度というな」

「卑猥じゃなきゃいいの？」

「下ネタと卑猥な言葉、それ以外は許す」

「わかったよ…」

「メタルゲームとかでお金を稼げるところは？」

「パチ コ」

「言ったな、死ね」

「待て、今のは言わせただろう！」

「しょうがない、今回だけは許してあげよう」

「二度と言わせないで！」

「仕方がない…」

「ホ…そういえば…ロミは？」

「あ…確認とりたいんですけど…」

「どうした、改まって」

・ロミを魔王退治に連れて行っていいですか？・

どうせ、無理だといわれるのを承知…と、覚悟をしていたけれど、フランクリは真剣そうな顔をしていった。

「フ…そんなことか…」

「…ダメ…ですか？」

「誰がダメといった、さらって行っていいぞ。」

「さらっ…って…本当にいいんですね？」

「ああ、しかし条件二つある。」

「なんだ」

「一つ、ロミの許可も得る」

「フムフム」

「二つ、下ネタ&卑猥の言葉をいってもいいか？」

「う…なら」

「なんじゃ？」

「ロミと僕の前では言わないで…というか、子供や、女の子の前では言わないでください」

「なんで？」

「子供が知ってはいけないこともあるからです。女の子は特にです」

「…条件を呑もう…」

「よし、約2週間後くらいには出発するね」

「ずいぶん早く行くんじゃない？」

「しょうがない、早く平和にくらいしたいんだ」

「隠居？「死ね」

「反応早いよな…」

「うざい奴が父親だったのね…」

「フム…」

「ロミのお母さんと同じ状態なんです…」

「ロミの母親と同じ？…わしー!？」

「いいえ、タカです」

「その驚じゃない!」

「いいえ、トシです」

「タカトシ!？」

何で日本の芸能人を知ってるんだ？

「タカトシではない、お前が歳いってるといふことだ」

「年齢!？」

「いいえ、頭です」

「頭は逝ってません!」

「ん…全部だった?」

「それ死んでるし!」

「俺が殺した」

「今生きてるし!」

「ドッペルゲンガーだ」

「殺したのがか?」

「いいえ、生きているのがドッペルです」

「わしはドッペルじゃない!」

「そつだ、驚はドッペルじゃないぞ、お前がドッペルだ」

「私はドッペルじゃない!」

「またまたご冗談を」

「冗談じゃない!」

コントしている間にロミがきた。そして…

『生きているのが冗談だと思つよ』

「!?!」

『あ…ハモつた』

何でハモるんだ!!!

第十一話 勇者の仕事は魔王を倒す事（後書き）

カイ「テストどうだった？」

作者「確かに今日テストだけどこれ書いたのは今日じゃなくて日曜日だからわからない」

ロミ「ややこしい」

フラ「だめじゃぞ、これくらいのことかわからないと」

作者「じゃあ簡潔にまとめると？」

フラ「日曜日テストがあつたんだよ」

カイ&作者「バカじゃないの？小学生じゃあるまいし」

フラ「!?!」

かん（カイ）「だからいれなくていいって!」

作者「すまない」

第十二話 ロミの決断（前書き）

テスト終了

第十二話 ロミの決断

「私決めたよ！」

僕とジジイがコントをしている間に考え終わったようだ

「…どうするの？」

僕が真剣な顔をして聞くとロミは

「わ、…私もいくことにした」

と言った。

「…本当？結構つらい旅かもしれないよ？安易な考えじゃない？」

「うん…私はカイさんと一緒にその魔王を倒す！」

「ロミ…「わーい！わーい！これでロミからのお説教がなくな」…
「死ねジジイ、雰囲気こわすな！ボケ！死ね！消えろ！ここから消え去れ！」

「カイ君…言い過ぎじゃ…？」

「…スマン、ただあまりにもKY過ぎると思う」

あのタイミングで説教がなくなる！わーいわーいなんていつてる
やつは、どこまでKYなんだと聞きたくなくなる

「ワシはいないほうがいいのかのぉ…」

「せめて、俺たちができるときまではいる。あと持ってる金は全部わたせ」

「なにその強盗!?!」

「恐喝だな、強盗ではない」

「とりあえず持つてる金全部はやめて!」

「しょうがない、4分の1の金でいいか…あとポーションとか薬草とか、あと前も言ったようにロミにも武器をくれ」

「多っ!」

「ロミがジャデツパに襲われたらどうするよ。毒消しのポーションがないとだよぉ?」

「う…わ、わかった…だから剣を鞘にしまって…」

「注文が多いな…」

「それはお前じゃ!」

「なんか言った?」

「いえ、なにも…ハハハ…(グスン)

数日後

ロミと僕がこの村、ティナイルをでる事は、町中に広がった。そのおかげで僕たちは、探検キット（テント、ライト、非常食、トランシーバーなど）や、薬、^{ポーション}狩りセット（ナイフ、肉焼きセットなど）など、いろいろなものをもたらした。そしてこの村をでるまで、あと1週間となた僕たちとはというと…

「ロミ、そんなにいらなくない？」

「ダメよ、そんなんじゃ、瀕死のときに襲われて死んじゃうよ！」

「ただ荷物が多すぎても困るじゃん…」

ポーション類の製作である。ただ作りすぎても持っていけないのが出てきたりすると思うし加減はしといたほうがいいと思うんだけど…そう思っていると

「ちゃんと魔法をつかって各町に共通しているアイテムボックスがあるの！なくなったときにわざわざ作らなくてもいいでしょ？」

「あ、なるほど…」

ようやくここまで作る理由がわかった…え？どこまで作った？回復薬はもらったのも入れて約2000個くらいかな…ほかにマナが回復するやつとか、解毒薬、傷が早く直る薬など、全部入れると

約5000個くらいだと思う…ここまでであるとアイテムボックスにまで入らない気がしてきたが…そこもロミが答えてくれた。

「アイテムボックスの上限はアイテムとかは3万個、装備品とかは5000個まで入るんだよ！」

らしい。どうやらアイテムボックスは余計なものを詰め込まない限りはほぼ無限というわけだそうだ

「そりゃすごいな…」

「この世界は科学ではできないことも魔法ではできるんだよ！」

「向こうの世界では魔法もないしな…あつてほしかったなあ」

「へーなかったんだ…おもしろいのに…」

「科学といえば…銃とかはあるの？」

「銃？…ああ…ピストルのこと？」

「ピストル…あ、英語なのか」

「そっちの国では銃っていつの？」

「いや、いろいろな種類があるのさ」

「へー…」

雑談をしながら薬を作るロミ。でも僕は薬はつくっていない。薬

草なんてまったくわからないからだ。だから僕はというと…

「ロミ、このボウガンは？」

「んー…ちょっとかつこ悪くない？」

「そっかなあ…」

ロミのボウガン選びである。ロミに貸したボウガンは性能がわるく、矢が狙ったところにどうしてもいかない。…いや、ロミが悪いんじゃない。使っている木が問題だ。さすがに長年使ってないと木も腐るので、とりあえず新しいボウガンを、カタログで選んでいるのである。しかし、なかなかロミに似合うボウガンがないのである。

「これは？」

「うーん…使いづらそう」

「ん…ロミ…これは？」

「青く塗ってあるボウガンか…いいね、これにしよう」

「重さとかは…お、結構軽い、800gだったぞ」

「おー、いいねー」

「性能は…約100Mまでは絶対にあたるって」

「絶対にあたるとかいつて…腕が悪ければあたらないでしょ…」

「そつだよね…」

「そついえば金額は？」

「えーっと……え？」

「どつしたの？」

「に、二十五万G……」

「高っ！」

「今日も平和だ…」

第十二話 ロミの決断（後書き）

カイ「どうだった？」

作者「やばいかもw」

カイ「乙ww」

ロミ「一番出来た教科は？」

作者「理科かな」

フラ「わしと同じか」

作者「やっぱり国語だな」

フラ「わしがいったあとに変えるのやめて!」

作者「うざいんだもん」

フラ「!？」

第十三話 カイとロミの新たな武器（前書き）

テスト終了。昨日疲れていたためストックができなかった…。ので、すこし遅くなりました

第十三話 カイとロミの新たな武器

ロミは行く、という決断はしたが。僕はロミを守ることができのかが、とても心配になってきた。さすがに、ロミはボウガンしか使えないと思う。すると接近では僕が頑張らなければいけない。はたしてロミを守りながら自分の方にも集中できるか。とても不安になってきた。

そこで僕は投げナイフも使うことにした。投げナイフなら接近も遠距離も攻撃できるためだ。風を纏わせれば簡単にコントロールできて、攻撃力もあがるとおもったからだ。

ためしに木での的を作り、マナを1ほど使い、風を纏わせて当ててみた。すると、的は割れて粉々になって貫通し、奥の木にあたり、その木を倒す。という大惨事になった。さすがにロミを巻き込むと困るので、風は纏わせないことにした。するとこんどは威力が少なくなり、的にも当たらなくなった。

さすがにそれじゃ困るので、風をさっきの100分の1ほど纏わり、投げてみた。すると今度は、的は割れて、そのまま落ちた。

力加減はわかったので次は飛距離だ。たとえば、威力の調整ができたとしても、そこまでとどかなかつたら意味がないのでまず10Mでためす。

∴ 楽に届いた、次は25M

∴ すこし落ち気味だったが届いた、次は50M

∴ 届かないですね、風を10倍に縫わして再挑戦すると、今度は行き過ぎた。

ここで気づいた、1M=0.001マナくらいでサポートできる

んじゃないのか、と

今度は50Mでマナを0・05ほど使い投げてみる、するとちゃんと的に当たった。

次は限界に挑戦してみることにした、10kmはなれた場所に行き、マナを10使い風を纏わせ投げてみた。そして自分にも風魔法を使い一気に10km先まで見に行ってみると…

「な、なんか的に当たってますけど…」

当たっていたのである。風で方向はサポートしたが、まさか当たるとは思っていなかった…10kmですよ？そこまで遠くに投げて何の意味があるかっていうね。

まあ、もしものときのために双眼鏡を買ってみた。しかも倍率はよく、見えるのは1kmまでは見えるという、かなり心強い存在となった。

投げナイフはとりあえず500本ほど買っておいた。ロミが投げナイフが50本ほど入る専用ポーチをつくってくれたが、残りは闇魔法を使い圧縮し、それもポーチに入れておいた。しかもポーチからとると自動で装填してくれる機能付だ、もちろん魔法でだ。

僕の武器が増えたところで、次はロミだ。

ロミは結局あの後25万のはあきらめて、性能を意識することにしたらしい。ロミがほしい機能は、

「スコープ、自動装填、ブレ止め」の三つらしい。ブレ止めはさすがにないだろう…と思ったが、魔法で簡単にサポートできるらしい。そのサポートを、意識しないで、できるようになるのがほしいらし

い。

ロミがほしい機能がついているボウガンは3個、一つは前の25万G、二つ目は黒いボウガンで15万G三つ目は、また青いボウガンで10万Gだそうだ、しかし10万Gのは重量が2kもあるらしい。

「この三つでどれがいい？」

「んー…僕は黒いボウガンかなあ…」

「んー性能はいいんだけどね…」

重さは1kだ、800gよりは重いがしょうがないと思う。しかし…

「色が嫌なんだよ…」

黒いボウガンは嫌らしい、ロミにペンキで塗ればいいじゃんと言
じつ…

「この町には塗装屋がないし、変に塗ると性能悪くなっちゃいそう」

と、言っていた。しかし調べてみると、旅の最初の目的地、ガリルに、腕のいい塗装屋がいるらしく、そのことをロミに伝えると

「なら空色に変えてもらおうかな」

と、結局15万Gの黒いボウガンを買うことにした。

金は町を出ると知った住人たちから20万Gほど、ジジイからは10万Gほどもらったため、金はある。

ロミも満足していた…

今回買ったもの〔ボウガン、矢（1000本）、投げナイフ（500本）、双眼鏡〕

合計金額〔15万+5千+1万+1千〕16万6千G

残金13万4千G

第十三話 カイとロミの新たな武器（後書き）

ロミ「テスト返された？」

作者「数学だけね」

カイ「点数は？」

作者「…」

カイ「？」

- 現在コソコソ話中 -

カイ「…低いね」

作者「思った…やっぱもうちょっと頑張らないとな」

フラ「フ、わしの若いころは100点だったのお…」

ロミ「こんなところにフランクリとかかれた30点のテストが！」

フラ「!？」

モンハンネタ多すぎ？気にしない。

第十四話 … ヤバイ… 超恥ずかしい… (前書き)

カイ君がグレたり恥ずかしがったりします。

作者はレンの暴走を聞いてこういう気分になったんです。仕方がないです。

(VOCALOID好きな作者でした)

ハイ… スミマセンでした…

第十四話 … ヤバイ… 超恥ずかしい…

さて、いろいろなことをしているうちに、ついに明日この町に出ることになりました。

そして今僕は何をやっているかと言つと…

「えーっと、探検セットに狩りセットに…」

持ち物チェックでございます。持ち物はちゃんとチェックしましょうと親にいわれることが多かったので、いつのまにか癖になってしまったのです。

「後は… ポーションと… あ、あと双眼鏡もないと…」

「カイ君… そんなことよくやってられるね…」

「当然！ 忘れてたら困るからね！」

「アイテムボックスのことを忘れたのかしら…」

「いや、次に行く町って1ヶ月くらいかかるんでしょ？ きっと」

「カイ君… だれかから聞いた情報？」

「いや… 推測…」

「ここからだったら… そうだなあ、12時間はかかるんじゃないかな…」

「やっぱそれくらいか?」もう一回言ってくださいますか?」

「ここから、次に行く「ガリル村」には、12時間はかかるんじゃないかなあ?」

「…じゆう…に?」

「そう、十二時間」

「…ハア?」

「いや、それは私のセリフ…」

いや、普通に恥ずかしいんですけど…うん…ちょっと…ああっ! 頭がこんがらがってきた!

「あのね…推測で考えないでね?…」

- 気まずい空気発動中 -

&

- カイ君がグレたようです -

「うう…」

「そう落ち込むなカイ君…」

なんかジジイが話しかけてきたけどそんな気じゃないよお…

「…いつもならここでうつせえジジイとかかえしてくるのに…」

「…うわー恥ずかしいよお…」

「…」

・ジジイが黙ったため気まずい空気再発動・

「まあそう気にするなカイ君…君はこの村に来て2週間しかたっていないんじゃない？カイ君」

「そうだけど…自信満々で一ヶ月くらいかかるんでしょ？なんて…」

「…ク…ハハア…ハツハ…」

ピキッ！

・ジジイによりカイがキレました・

・しばらくお待ちください・

「ふう…ジジイいじめたら少し楽になったな…」

ジジイは火傷し、感電し、溺れて、土で固められてから氷でさら

に固まり、そこから重力で押しつぶされたようです。

「さて、といてあげるか……」

とりあえず火と光を使い開放させる

「……ガクッ」

「気絶しましたね……はい……」

そのまま僕は外に出て行った

・ロミ視点・

あのあとカイ君はフラン爺のところに行ってしまった……私は悪いことしちゃったかな……ちょっと不安になってきた。カイ君はいまどうしているんだろう。ちょっと気になってきちゃった

フラン爺の部屋に行ってみると何か声がきこえる……何を話しているんだろう……耳を澄ますと声が聞こえてきた

「まあそう気にするなカイ君……君はこの村にきて2週間しかたっていないんじゃない？カイ君」

「そうだけど……自信満々で一ヶ月くらいかかるんでしょ？なんて……」

「…ク…ハハア…ハツハ…」

あ、なんかフラン爺が笑ってる…あのタイミングで笑ったら…
そんなことを考えていると部屋から音が聞こえてきた。

…あれ絶対にカイ君キレてるよね…

とりあえずカイ君が部屋からでたらフラン爺生きているか確認し
なきゃ…

- 数10分後 -

「さて、といてあげるか…」

「…ガクッ」

「気絶しましたね…はい…」

気絶なのかな…そうだったらいいんだけどね…あ、部屋から
出てくる！

バタン

カイ君はそのまま外に出ちゃった。私はまずフラン爺の安否を確
認しなきゃ…

ボタン

「フラン爺…いきてる?」

「おう…今のは効いた…」

「カイ君に何された?…」

「火で燃やされて雷で感電させられてそのあと水で溺れさせて、そのあと土でかためられて氷でさらにかためられて重力で押しつぶされました…」

「ん、そこまでしゃべれるなら元気だね、治療は自力だね」

「ちょっと…ロミ…」

とりあえず大丈夫そうだから部屋を出る。私はカイ君に謝らなきゃいけないしね

- カイ視点 -

「はあ…気分転換に投げナイフの訓練でもしてるか…」

ジジイを殴ったあと、することが無くなり、結局外へでて投げナイフの練習をすることにした。

ロミに謝ろうかと思っただけども、とても気まずくて会う気になれない。それはしょうがないんだけどね…

100M離れた場所に的を置き、そこに風を纏わせたナイフを投げる

サクッ

「あ……」

まだ落ち着いていないのか、的をそれて木に当たってしまった。もう一回挑戦しよう……

ピキッ

今度はうまく投げれたようだ。ナイフを取りに行くと……そこにはロミがいた

「あ……カイ君……」

「……」

ダメだ……まだ気まずい……けど……とりあえず口に出す

「あ……あのさ……ゴメンねっ……なんか……急に怒っちゃったりとかして……」

「……別に……私は……嫌じゃないよ……」

「……」

「……」

「うん…帰ろう…帰って寝てわすれよう！明日は出発だし！」

「…そうだねっ…帰ろう…出発なのに…こんなことになっちゃダメだよねっ！」

「明日のために準備しようか！」

「そうだね、1ヶ月かかる旅にねっ！」

「思い出させないでお…」

僕は恥ずかしかったんだよ…でも…出発前にちゃんと仲直りできてよかったよ

ロミとの距離が少し縮まったカイでした

第十四話 … ヤバイ… 超恥ずかしい… (後書き)

フラ「カイ君いいなーワシだったら絶対あのあとだきしm(一同)
「死ね！クソジジイ！」

フランクリはそのあと全治2週間のケガを負わされた

第十五話 シジイをベッドに… 旅立ち（前書き）

テスト？死にました

第十五話 ジジイをベッドに… 旅立ち

家に帰ってくると、まだジジイが倒れていた。まあロミは、迎えに来る前に安否は確認しておいたから大丈夫だと言っていたが…なんとなく、ジジイはこのまま倒れてて、気がついたら二人ともいなくなっていた…的な物語を作るか…

なんとなくそんな気分になってカイはロミに相談する。

「ロミ、ジジイが起きてみるとそこには二人はいなかった…的な物語つくってみない?」

頭で考えたとおりに言うカイ。

「カイ君…何のためにそうするの?」

「ん…仕返しできそうだから」

「…何の仕返し?」

「色々…ね」

さっきのことはまだ根に持っているんだよ!マジうざい…人が落ち込んでいる理由話して笑うとか…KYすぎる…だからジジイの部屋から色々盗んでいきたいけれど、それじゃ犯罪になっちゃうから(十分犯罪)…僕が考えているとロミも何の仕返しかわかったように、ロミも考えるようになった…そして

「なら…ジジイをベッドに寝かせて、縛り付けておけば?」

「…！それいいかも！」

「なら、さっそく帰って縄もって縛ろう！」

「おー！」

・フランクリの部屋・

フランクリは、意外と重かったが、カイと、ロミだけで何とか運べる重さだった。ベットまでの距離も、意外と短かったため、スムーズにいけた。

「よし…起こさずにベットまでつれてこれたね」

「まあ気絶してるもんね…」

「あとは…縛り付けるだけだね…」

「そつとだよ？」

そんなことをしているとジジイが目を覚ましてしまった

「なんじゃ？どうさ）ゴーンッ

とりあえず魔法で氷を作り、殴る

「あぶなかったね…」

「おきられたら困るもんね…」

「よし、再開だ」

「わかった…」

・ 数十分後 ・

「できたっ!」

「完了だねえ」

ベットにくくりつけることはできた、あとは出発である

「よし、じゃあ僕たちも寝ようか!」

「あ、でも夜中に目を覚ましたら?」

「そうだなあ…睡眠薬ある?」

「あ、それならタンスの右から2番目に…」

「了解…これだね。これを口の中に入れて…水でとかしておけば…
OK、これなら目を覚まさないよ!」

「よし、僕らも寝よう」

「じゃ、おやすみ」

「おやすみ、ロミ」

・自室・

明日はついに出発のとき、後は寝て、力をためるだけ…なのに、やっぱり寝れない…寝ないとやばいのでとりあえず外に出てみる。

外に出てみるとやっぱり誰もいない。このまま寝れないと困るので、ジジイの部屋に睡眠薬を取りに行く。さすがに寝れないとロミも心配するしね…そう思いフランクリの部屋に入る…そこにはロミもいた

『あ』

なんかハモったけど…

『どうしたの?』

…あれ

『そっちこそどうしたの…』

…どっしり

「あ、僕は睡眠薬取りに来て…」
「は寝れないから睡眠薬を…」

「私

「やばい、ここにきた内容も一緒ってどういふことだろう」

「同じ内容か」

「だね…というか最初のハモリなんだっただろう…」

「ね…息びつたしというか…」

「まあ、これから旅をする仲間なんだしね」

「当たり前なのかな」

「かな…とりあえず寝よう？」

「そうだな…あ、僕にも睡眠薬ちょうだい…」

「あ…はいどうぞ」

とりあえずロミからもらった睡眠薬を水と一緒に飲む

「ん…ありがとう」

「どづいたしまして じゃ、おやすみー」

「おやすみなさい」

・翌日（午前5時）

「ロミ、おはよう」

「あ…おはよう」

「今日はなるべく村の皆に知られないようにしよう」

「え？どうして？」

「…だって荷物が…」

「…あー」

つまり、送られるが嫌なのではなく、お土産などをもらいたくないのである。だって荷物がいっぱいなんだもん。

「なるほどね…でも…5時に起こすことはないじゃん…」

「…すみません」

「ま、いいや、じゃあ行くわ」

声には出さないが、ロミが機嫌がわるいきがする…まあ僕が5時から起こすのが悪いんだけどね…

とりあえず持ち物を持ち、外へ出る。すると…

「…誰か知らせた？」

「…うつん？…何この人数」

そこには、ジジイが僕を紹介したときと同じくらいの人が集まっていた。

「あのクソジジイだな……」

「だね……どうするの?」

「ああ……あそこに行かなきゃ申し訳ないもんな……わかった、行こう」

「あ、あれ勇者じゃね?」 「本当だ……あ、村長のお孫さんもいる!」

「本当だ……勇者と一緒に行くんだ……」

「……やばい」 「この中通りたくなってきた……」

『えーみなさん!勇者たちを拍手で迎えてください』

『!?なんでジジイがいるの!?!』

なぜか知らないが、ベットで縛り付けられて寝ているはずの、ジジイがステージの上にいる。

パチパチパチパチパチパチパチ……

「ロ……」

「ここは……まかせて」

「わかった」

「集まってもらって悪いがそんな時間はないっ!」

周囲のマナを集め進行方向に氷の魔法を放つ。もちろん人に当たらないようにだ。しかし、人ごみの中ではそんなことはできないので、少し上に放つ。氷の道をつくったら、その道を、急いで上る。だがとても滑りやすいので、僕とロミには風魔法で追い風を作る。これならほかの人は上れないため、簡単にかわせる。

氷の道が途切れたところは町の城壁の上、そこからさらに氷魔法で道を作る。もちろん追い風は消さずに残しておく。そしてそのまま走る。

5分走ってみると、もう町は見えなくなっていた。

実は、このときジジイが馬車を用意していたことは、カイとロミは知らない…

第十五話 ジジイをベッドに… 旅立ち（後書き）

カイ「テスト…乙」

作者「期末は絶対に…この失敗をバネに…」

ロミ「がんばれ〜」

フラ「フ、少しはワシを見習え！」

ロミ「あ！こんなところにカンニングと赤ペンでかけられた0点のテストが！」

フラ「！？」

カイ「へーカンニングしたんだあ・・・」

フラ「うわあああああああああああつ！」

ロミ「あ、また逃げた」

作者「しかしさ…なんか最近「初音ミクの暴走」が歌えるようになってきた気がする」

カイ「それすごくない？」

作者「まあ、ぜんぜん発音できてないところもあるし、まだまだだけど、リズムにあわせることはできる」

カイ「…歌えてないのね」

作者「裏表ラバーズやレンの暴走は歌えます」

カイ「あ、それは…まあね」

フラ「僕は生まれそして気づく所詮人の真似事だと知ってなおも歌いつづく永久の命VOCALOIDたとえそれg…あーもう無理」

作者&カイ&ロミ「歌ってよ、そして舌嚙んで死ね」

フラ「！？」

盗賊のボスがそういうと、後ろから100人ほどの盗賊が姿を見せた。

「この人数…やばいかもな…ロミ！足場に！」

「…了解！」

瞬時にマナを集めて、今度は自分がたっているところを凍らせて浮かせる。盗賊たちの手の届かないところまできたら…

土魔法・クエイク・

「！？」

盗賊たちは突然の地震に驚く…そして揺れで動けなくなった
もちろんカイはそれを狙っていて、そこからさらに…

闇魔法・グラビトン・

さらに重力でしばる…当然動けない、が念のために氷魔法でも縛る。

「う、動けない…」「やばいぞ…これ！」「魔法使いだとお…聞いてない…」

何か言ってるけれど無視して…

光魔法・ライト・

ダメージは殆どないが視界を奪うことができる光魔法、ここでは

使わないが治療する効果もある。

「光魔法！？グ…目が見えない…」

「ロミ！今のうちに逃げるよ！」

「わかったわ！」

とりあえず、ガリル村に向かって走った…もちろん風魔法を使って追い風を作り…そして気がついたときにはもう、半分くらいのところについた

「…疲れたあ…」

「足が痛くなってきた…」

「とりあえず休憩にする？」

「そうだなあ…もうおきてから2時間くらいたってるし…朝ごはん…」

そういつて空を見ると、もう日が昇っていて明るかった。

「えーっと…ごはんはないよ？」

「…え？」

「ご飯がなかったら何を食べれば…」

「だって…薬でとるってカイ君が言い出したんじゃない…」

「…あ、そうだったね」

薬とはやばい薬ではない。一粒で1食分のエネルギーがとれる薬だ

「もうっ！しっかりとっかりしてよね？頼りになるのはカイ君しかないんだから…」

「…ごめん」

「…で？薬は？」

「僕が持つてる…ちょっとまってね」

そう言って闇魔法で圧縮されているいろいろなものを光魔法で戻す。…あ、これだ。見つけたらまた闇魔法で圧縮して、ポーチの中に入れる。

「これだよね？」

「そうそう、一粒頂戴」

「はい、どござ」

「どうも」

パク…ゴクン

感想？食った感じがしないし味もないからおいしくないけれど、腹は膨れた…っていうところかな

「…不思議だなあ…こんなんで腹が膨れるとか…」

「薬草と科学の力です」

「これは魔法じゃないのか…」

「そっだよー…じゃあご飯も食べたし、また出発しようか」

「よし！じゃあ出発…」

- 30分後 -

現在、ティナイルからの一本道をずっと歩いてきています。周りには森のみ、地面には舗装されてない道…

「ぜんぜん先が見えない…一本道って逆に嫌だね…」

「大丈夫、もう半分以上はいつてるしね。」

「半分以上！？12時間じゃないの!？」

「ってか軽いトラウマ…」

「カイ君…風魔法で追い風作って走ったでしょう…」

「あ、そっか」

「しっかりしてよ…:」
「…:」

「…:あ」

「しっかりしてよね?カイ君。もう一回いつけど頼りになるのはカイ君しかいないんだから」

「…:すみません、すぐに追い風を作ります…:」

あれえ?僕のほうが年上だったきがするけど…
とりあえずマナを集めて風に変える。そして追い風にする

「よし!完了!じゃあいこう!」

「了解!」

・1時間後・

「あれじゃない?」

「本当だ…:結構ちっちゃい村だね…:」

「そうだね…:あれ?なんか近くに人がいるよ?」

「…:あれ人じゃない…:」

「え?じゃあ何?」

「あれは魔族…名前は「オノマーク」って言う魔族…」

「魔族!?!…強いのか?」

「いや…比較的弱いけれども、ジャデツパより頭はいいの。力はないけれど、武器も持っているから強いのか…」

「武器?何も持っていないようにみえるけど…双眼鏡で見ると…」

双眼鏡をポーチからとりだし、オノマークを見てみる、すると…

「…なんか手に拳銃みたいなもの持ってる…」

「拳銃?ああ、ピストルですか…私に任せて!」

そういつてロミはボウガンを構えた

・ロミ視点・

外したらどうしようかな…そんなことを思いながら私はボウガンを構える。…距離は約70M…このボウガンなら確実に届くね…まずは矢を一本とり、ボウガンに差し込む。そしてスコープを覗いて引き金を引く準備をする。

カイ君が投げナイフの練習をしているとき、私も練習していた。きつとオノマークにあたるはず…そう思いながらスコープを覗き、オノマークを中心に合わせた。そして…一気に引き金を引いた。

第十六話 盗賊参上！（後書き）

カイ「補足です」

ロミ「オノマークは、痩せていて骨が見えている、スケルトンです。

カイ「スケルトンにすこし肉と皮がついたと思ってください」

第十七話 オノマーク撃退！村長の家にいざ！(前書き)

口ミ視点のままです

第十七話 オノマーク撃退！村長の家にいざ！

引き金を引くと、矢は一直線に飛んでいく。オノマークは、まだ私たちがいるって事に気がついていないみたいだから、矢をよけることはできないと思っていた。しかしオノマークは…避けた。

「え！？何で！？…あ」

「…音だな」

そう、音だ…矢が飛んでくる音を聞いて、瞬時に避けたんだ…

「カイ君…こっちに気づいたみたい…」

「わかった…こっちにきたら援護をする」

「…ありがとう」

私は矢を10本取り、自動装填をできるようにする。そしてこっちに向かって走って来るオノマークに向かって矢を撃つ。

1本目は横に飛ばれて避けられる…そこで私は避けたほうにもう一本矢を飛ばす。しかし今度はピストルで矢を撃ち、落とされる…でも私は気にしない。そのままもう一本撃つ。

オノマークは3本目のことは考えてなかったようで、矢を避けられず、腕に刺さった。しかし、それだけではオノマークは倒れない。もちろんそれは予想していた。矢を1本、2本、3本、4本、5本…と飛ばしていく。しかし今度はオノマークも避けた。そして10

本目、今度はよく狙って撃つ。相手が避ける方向を予想して…しかし、逆の方向に避けられて、あたらなかつた。

そして仕方なくカイ君に助けを求めた…

- カイ視点 -

あたった矢は1本か…なかなか素早い動きをするやつだ…僕は口ミに代わってくれといわれたので、僕は投げナイフを3本準備する…そして風を纏わせる。もちろん3本共に…1本目は避けられると思ひ、ならば避けられないスピードにすればいいや！と、マナを3使い、風を纏わせた。

そして一気に投げる。オノマークは余裕でかわせるぜ！という顔をしていたが、投げるとそのスピードに驚いていた。マナを3使うということは、3km先まで届く力だ、さすがに避けれないオノマークは、顔に直撃を許してしまった。

そして倒した、と思ったらまた起き上がってきた…ゾンビですか？あのスピードは人間が食らったら死ぬぞ？なんで生きているんだよ…と、残りの2本の投げナイフをマナを20使い、分ける。つまり1本でマナ10使う。マナ10は10km先まで届く力だ。

とりあえずそれを2本いっぺんに投げるともう力のなくなっていたオノマークは避けることができず。また顔面にヒットした。しかも投げたナイフは貫通したので、頭に穴が開いたことは確実。オノマークはそのまま倒れた。

「ロミ、大丈夫？」

「…うん」

「…怖かった？」

「ううん…ただ…私も強くならなきゃなあ…って思ってた…」

「大丈夫、ロミは強くなくても、ちゃんと僕が守るからね」

なんてかっこつけても、僕じゃ倒せないヤツだったら困るけれどね。

「…カイ君…ありがとう…」

「どういたしまして。さあ！じゃあ新しい村、ガリルに行きますか」

「うん！」

・ガリル村中央広場・

ガリル村は、意外と小さく、ティナイルの2分の1くらいの大きさだった。周りは、森に囲まれていて、意外と自然が多い村だった。家の数も少なく、お店などもとてつもなく少ない村だった。

「本当にちっちゃい村だね…まずはこの村の村長さんに会いに行かなきゃ…」

「そうだね！」

このあたりのボスを聞きに行くためだ。まあ予想はついているけどね…

「そうそう、村長さんの家には、忒にとうの刀と堇いぢのやの矢の書があるらしいよー！」

「え？じゃあ剣技を新たに？」

「うん！そうみたい。私も技が使えるようになるから、カイ君も少し安心できるよー！」

「だね」

「あ、まって。村長の家に行く前に、ボウガンの塗装をおねがいしなきゃ！」

「そうだったね、じゃあまず塗装屋を探すか」

・ 10秒後 ・

「あれじゃないの？」

「見つけるの早っ！」

「じゃあ、私はボウガンを渡してくるね！」

「はい、いつてらっしやい」

「いつてきまーす!」

- 5分後 -

「ただいまー!」

「おかえり、ロミ、どうだった?」

「うん：空色はなかったけど、青色にならぬれるみたいだから、青にした!」

「そっか：残念だったね、でも塗れてよかったじゃん」

「うん、じゃあ村長の家にいこう!あれが村長の家だって!」

ロミが指差したのは、周りよりちょっと大きい家だった。

第十七話 オノマーク撃退！村長の家にいざ！（後書き）

ロミ「意外と強いなあ…オノマーク」

作者「まあ、ゲームだと2面ですからね。」

ロミ「まあね…」

作者「壱の矢を覚えれば変わると思っよ」

ロミ「おー」

作者「矢を二本撃てる技が壱の矢にあるんだ」（ネタバレ）

ロミ「なるほどーそれならジジイも楽に殺せるね」

作者「ww」

第十八話 村長の家はトラップ屋敷（前書き）

すみません、遅れました

リアルで忙しいので、またこんなことがあると思います。なので、今日から二日に一回のペースで進めさせていただきます。まことに申し訳ございません

第十八話 村長の家はトラップ屋敷

ロミが指差した家に行ってみると…

「なんか気味が悪い家だな…」

そこら辺の家と違って、壁も屋根も真っ黒なのである

「村長は黒が好きみたいだよ。だから塗装屋にも黒のペンキがいっぱい置いてあつたんだよね」

「逆にすげえな…」

話しながら村長の家に行く。門を開けて中に入ると…

パシユン！

「うわっ！」

瞬時にグラディウスを抜き、叩き切る。

「トラップか？」

「そうみたいね…もしかたらまだ仕掛けて…キャッ！」

言ってるそばからまた引っかかる…多すぎだろっ…

「ねえ…あの赤いボタンはなんだろう」

「ん？どいどいっ」

「ほら…あそこ…上から2番目の列の左から3番目…」

ロミにいわれたところを双眼鏡でのぞくと…

「あれ…たぶんすべてのトラップを止めるスイッチだよ…」

「ほんとう？なら私がボウガンで打つけど…」

「ん…じゃあお願い。…ってボウガンないんじゃない？」

「あ…やっぱり…なんでもないやあ」

「はいはい、じゃあナイフ投げるね…離れてて、危ないからさ」

「うん…」

ロミが下がったことを確認してとりあえず投げる…

ザクッ

やべ、外した…風纏わせるのをわすれていた…気を取り直して…
距離も正確に測る

距離、およそ50M…使用マナ0.05…ナイフに風を纏わし、
投げる

グサッ

「ふう、今度はうまくいたな……」

「とまった？」

トラップにわざと引っかかるが、まったく反応しない。

「止まったみたいだね」

「よかったー…とりあえず家の玄関にいこうよ」

「そうだな…トラップがないか確認しながらだけだね」

・村長の家玄関・

「トラップはなかったね」

「うん、さっきのがやっぱりトラップの切り替えスイッチだったんだね」

「だね、とりあえずインターホン押そ？」

「そうだね、じゃ……」

ピンポーン

【何！？私のトラップを抜けられたですと！？】

「あ、はい…村長さんはいらっしやいますか？」

【私が村長ですがあなたは誰で、なんのようですか？】

「あ、私は…勇者ですけど…最近の魔族のことと…昔の矢と弐の剣の書を読みたいなあと思ひまして…」

【勇者だと？そうかそうか、それなら入ってきたまえ。すぐに使に行かせる為、少し待ってくれぬか？】

「あ、はい、わかりました」

ガチャッ

「んーっと、使いを呼ぶから、玄関で待っていてくれってさ」

「ん、わかった」

- 1分後 -

「おまたせいたしました、どうぞお入りください」

『はい』

中に入ってみると、高そうな壺とかすごくきれいな絵画など、いろいろなものがあつた。

使用人に案内されて奥に進んでいくと…ちよつと書斎らしき場所に案内された。

「どうぞ、おかけください」

「あ、どうも…」

「主はあと5分ほどでこられますので、少々おまちくださいませ。」

「はい」

- 5分後 -

「そろそろかな…」

ガチャッ

「こんにちわーあなたたちが勇者ですか？」

『はい、そうです。』

フランクリよりは若い爺さんがでてきた

「フム…そちらの…黒髪の勇者さんはすでに^{いま}きの^{とう}刀は覚えたのかな
」？
「？」

「はい、ジズ…フランクリさんに見せてもらいました。」

「いいんだよ、ジジイっていつでも」

「はい…え？」

「いや、私もジジイってよんでいますから」

「そうなんですか、では改めて。ジジイに見せてもらいました」

「ハハハ…そうかい、君はマトウの地図は持っているかい？」

「いえ…一度だけジジイに見せてもらいましたが。」

「そうかい、ならコレを持っていくといい」

そういつてパンフレットのようなものを渡してきた

「これは？」

「マトウのパンフレット」

「ですよね」

中を開いてみると、地図があった。

「綺麗にできてますねえ」

「そうかい？うちの町で作ったものなんだ」

「へー…よくできてる」

といつても普通のパンフだけだね。お世辞ですよお世辞

それから、村長さんからいろいろなことを聞いた。

まず、ギルドのこと。ギルドは町の住民から受けたクエストを受け取り、それをほかの住民や、旅人などに受けてもらい、達成するももちろん、報酬もある。それがアイテムだったり金だったり、いろいろある。そして、ギルドは各町に一つ必ずある。ティナイルにもあるらしいが、気づかなかった

クエストは、採集、退治、護衛など、内容はさまざまである。

ギルドにはランクというものがあり、ランクによって、受けられるクエストが変わる。

ランクは、下から順に並べると

E D C B A S

らしい。ランクSの人は、今では4、5人しかいないらしい。ランクSは、オノマーク千対を1時間で倒せる程度らしい。

ジャデツパ千対を10分で倒したことから、ジャネットを倒したことを伝えると、あとでギルドにランクAのカードをつくりにいけ、といわれた。さすがにいきなりSカードは、疑われるし、強さもわからないから、どれくらい難しいのかを確かめるためにランクAに

してくれ、といわれた

ギルドのほかにも、渡されたパンフレットからも説明してくれた。

マトウーには、9つの町がある。ティナイル、ガリル、ローレッツク、ケリタ、フィレスアイランド、オサイル、ラテイル、バンホ、ダバンハだ。ダバンハは王都で、王がいるらしい。まあ王都だもんね。

いろいろな説明をうけていると、いつの間にか夜になっていた。村長が、「今日はここに泊まれ」といつてくれたので、喜んで甘えさせてもらうことにした。

それが旅の一日目だった。

第十九話 襲われたロミ（前書き）

1 回書いたら保存するの忘れてしまい、消してしまった…そのため
かく気力がなくなつたのです

第十九話 襲われたロミ

あれ…ここはどこだっけ…めのまえにあるのは見慣れない天井…
そうだ…僕は村長の家に泊まっていたんだっけ…

昨日の夜、もう遅いから家に泊まっていきな…といってくれたので甘えて泊めてもらった

ロミは僕の隣でよだれをたらしながら熟睡中…野宿のとき動物に襲われそうな気がするが…とりあえず起こすか…と思い、起こそうとした瞬間

「くるな…この変態がっ…」

「!？」

その寝言をのこして僕を殴り、蹴る…合計で7発くらい…僕は地面に倒れた

- 村長の家、隠し部屋にて -

「さて勇者さん、なぜ、死んだフリをしたのかな？」

「死んだフリじゃないです、本当死ぬかと思いました」

「…詳しく教えてくれ」

「ロミを起こそうしたら」くるな…この変態がっ…」って寝言を
いって僕を殴り始めました」

「え？私そんなことした？」

「覚えてなくてもしょうがないよ…寝てたんだし…」

「あー…そういえば夢でジジイが襲ってくる夢をみたんだよねえ…」

『それはしょうがないな』

・フランクリの部屋・

「ヘックシュン…風邪でもひいたかな…」

・村長の家・

そのあと色々な雑談をした。20分ほどしたあとにメイドさんが
きて、「ご飯をつくったのでさめないうちにお食ください、とい
いのこして去っていった。もちろん、ほかほかの日本食を残して…

・30分後・

「おいしかったです」

「そりゃあそうだ、マトウで8番目にすごいシェフっていわれて
いるんだから…」

「へー…」

カイ、ロミの心の中【8番目って結構下じゃないか？】

「けっこう下だと思っただろう、しかしな、私のシェフは50人中
8番目だぞ、すごいだろう」

カイ、ロミの心の中【50人中8位とか…500人中ならまだし
も…】

「さて、私は壱の矢と弐の刀の本を探しに行くが…勇者たちはどう
する？」

「あ、私はボウガンをとりに行かなきゃだから…」

「ん…じゃあ僕と村長さんで本を探すから」

「あ、ありがとう、じゃあ私はこれで」

「いってらっしゃーい」

「…さて、じゃあ…たしか書斎にあるから、書斎に行ってみようか」

「あ、はい、わかりましたー」

ボウガンを村長の家のすぐ前にある塗装屋にとりにいくだけだから、安全だと思っていた…しかし

「おい、その娘、ちょっとお兄ちゃんたちとあそばないか？」

目の前に現れたのはこの町の不良だ…私が断ると

「お金はいくらでもやるからさあ」

…女の敵だ…もちろん断るとナイフをもって近づいてきた

「さすがに俺たちは人を殺す趣味はないからさあ、おとなしくついてきてよ」

こんどは脅しか…しょうがないから相手をすることにする。

これでも私は村長の娘、護身術は6歳から教わった。いままで不良にからまれた回数は5回だが、5回とも追い払ったことがある。

まずはボスのまわりの一番弱そうなやつを殴る…フリをしてその隣の敵を蹴る。一番弱そうなやつはビビる、そして倒れたやつに気を取られているうちに弱そうなやつを殴る。そして最初に倒した隣にいるやつを蹴って、武器を奪う。あとは脅せばOKだ

「さて、女の子をなめちゃだめだよ？」

- カイ視点 -

「これですか？」

「おお、それだ、それが吉の矢だ。残るは忒の刀なんだがな…お、あつたあつた」

「よし、これで準備はOKだな…あとはロミが帰ってくるのを待つだけ…何!？」

「?どうしたんだ勇者…な!」

カイが見たものは…ロミが襲われている場面だった…

- 再度、ロミ視点 -

脅したら逃げてくれると思った…しかし…

「はは、ますますつれて帰りたくなつたよ…力づくでもねっ!」

「!?!?」

男が持っていたナイフは私の腕をかする…

「チッ!」

そのまま私はよけ続ける…が、息が上がってきてしまった…

「へっ、お疲れのようだな…いけっ！」

すると二人の男がわたしのそばに近寄ってきた…とりあえず蹴りで応戦するが、さすがにもうもたなかった…男はわたしの足をつかんだ…そして持ち上げてつれて帰ろうとした…しかし

ズサツ！ 「グアツ！」

「え？…あ…カ、カイ君っ！」

- カイ視点 -

あぶなかった…もう少しでロミは連れ去られてたぞ…そう思いながら不良たちに近寄る…

「…テメエか…いま俺の子分を刺したやつは」

「ああ、その娘は僕の連れだからね」

「へっ、なんだてめえ、ガキの癖に生意気な…行けっ！」

すると僕に向かって3人の男が向かってくるが…

「僕は戦う気はないから…」

光魔法 - ホーリー -

ホーリーは光魔法の3番目に強い魔法だ。さすがに光魔法なので、ダメージはすくないだろうが、視界は確実に奪えたと思う。

「っ！目がっ！」

「さて、ボスさん、返してくれないかな？」

「無理だ、俺の子分をここまで倒してくれた…だから俺を倒してからだ…」

第十九話 襲われたロミ（後書き）

さて…物語の構想だけで疲れてきたぞお…

カイ「さすが、3日坊主だね」

作者「黙れい」

第二十話 ボスとの戦い（前書き）

今回はかなり短いです

第二十話 ボスとの戦い

「あっそう？なら別に倒してもいいけど…」

現在不良に絡まれている状態…まあ、さほど強くなさそうだけど…
「武器制限は？」

「特別になくていいだろう、その盾と剣を使うがいい」

「お前がまけたらどうなる？」

「お前が俺を殺すがいい」

「殺さなくていいっていつたら？」

「ははは、そんなのんきな事言ってるいいのか？」

「答える」

「しょうがない…金の少しはくれてやるうか。まあ、倒せたらだが
なあ」

「…わかった、いくぞ」

「…勝負！」

まずは小手調べ、グラディウスを振り回す。

「へっ！そんな攻撃きくわけねえだろう？」

「子分とは違うね」

「そらそうだなあ」

次は魔法…風で吹き飛ばして隙を見ることにした

風魔法 - トルネード -

風魔法で最強の技、相手を吹き飛ばしながら攻撃できる技だ…しかし

「小僧がそんなもの使えるのはすごいなあ…ハッハッハ…でも…こつちだつてそれくらい使えるさつ！」

- トルネード -

「なっ!？」

お互いの魔法は混ざり合い、消える。

やばい…なら…一番発動が早い技…

氷魔法 - フリーズ -

氷魔法では遅いが、ほかの属性と比べると、かなり早い。発動に必要な時間は、およそ2秒、氷魔法で一番早いアイスは、1秒だ。だがフリーズは氷最強魔法のため、威力は膨大な量だ

「クッ!氷かつ!」

相手は瞬時に火魔法のバリアをだし、氷を溶かす…しかし

「バリアをはつても意味がない！」

「何っ！？」

氷はその火をすり抜け、相手にあたる

「水かつ！」

「氷を作るときに闇魔法で毒も入れておいた。」

「毒か…だが俺に毒はきかないぜ…ハッハッハッ」

「チツ…」

魔法でも勝てない、それなら剣に頼るのみ。

「ならコレで…」

吉の刀 - 疾風斬 -

「…剣か、では俺も…」

参の刀 - 天照 -

天照は、自分の前方を斬り、そこから電気を発する技だ。斬る範囲は短いが、雷の範囲は大きいので、よけるのは難しい

だが、疾風斬が発動が早いので、相手にダメージを与えることができるのは確実だ。…天照が発動する前に範囲外ににげるか、相

手を倒さなければ、自分も食らうが…

カイも技のことは知ってるので天照を使ってくることはわかった

だが…

ザシュツ！「クツ！」

ザクツ！「…えっ！」

ビリッ！「クアッ！」

なぜかあたったのだ…しかも電気だけではない、突き刺す攻撃もだ…

カイは瞬時に水魔法と光魔法を使い、ケガを直す

「なぜだ？」

「後ろに逃げるとわかっているなら、その方向に攻撃をすればいい」

「…く」

「まあいい、次で決まりそうだな」

「ああ…」

「じゃあいくぞ…」

「勝負っ！」

第二十話 ボスとの戦い（後書き）

カイ「作者はゲームをするといって去ってしまった…短いだろうこれ…」

ボス「俺の出番増えるからいいんだがな」

カイ「たぶん次回でお前の出番はなくなるがな」

ボス「」

第二十一話 ポスとの決着（前書き）

第一章だけで200話行きそうなペース…怖っ！
ちなみに第一章は、八大魔族を倒すまでです…
とてつもない長さなのです。

第二十一話 ボスとの決着

「じゃあいくぞ…」

「勝負っ！」

- カイ視点 -

まず、相手が動いてから様子を見る…が、ボスもそのつもりのようにうだ。

仕方ないから適当に動くフリをする

まずファイを唱える。その次にエレキ、次にウオタ、最後にウインドを唱える。

それを適当に投げる、すると

「ウラアッ！」

「…」

簡単に斬られた、しかもさっきより早くなっている…剣技で早くしたな…参の刀であるし…

唱えているときにチャージしてたんだな…そうなるとても厄介である。

氷魔法の速さでも追いつけないし、力でも剣で叩き伏せられる。

…だが、火力不足ではいくら攻撃が入ったとしても勝てない、まずはずは…

壱の刀・アサルトチャージ・

まずは攻撃力があがるチャージを使う。そして僕は投げナイフを影で用意する

闇魔法で光をない状態にすれば、何をやっているかは見えない。そうして投げナイフを5本用意した後は風魔法を使い、速度を高める。さらに…いままで使った事がないが、火も纏わせてみる。

投げる準備をし、相手を見つめる。

「準備はいいか？」

「…ああ」

「…行くぞ」

「いざっ！」

- ボス視点 -

相手を見ると、こっちの様子を伺っているようだが…俺は無視して、隠れて技を使う

参の刀・神達・

速度を上げる技だ…普段の3倍の速さで動ける技…相手は使っていることに気がついていないが…

相手を見ると合成魔法をしていた。見たところ火、雷、水、風…だ。するといきなりこつちに飛んできた。

「ウラアツ！」

「…」

もちろんよくれたが、癖で叩き斬ってしまった。相手にも神達を使ったことがばれてしまったようだ…

相手は俺の防御では速さでないと勝てないと思っただろう…3倍の動きでもいくらでも越えられるしな

だから俺は力で叩き伏せることにする。

もちろん速さは相手のが早いだろう…だが間違いなく力は俺のが上だ…

だが相手もそれをわかっていているようだ…相手もアサチャで攻撃力をあげているし…これは互角の力だな…

俺も剣を抜き、防御の姿勢をとり、相手を見つめる

「準備はいいか？」

「…ああ」

「…行くぞ」

「いっせー！」

- カイ視点 -

相手は防御の姿勢をとっているが、気にしないで投げナイフを投げる

1本目…

横に跳ばれ、避けられる

2本目…

避けた場所にナイフが来たのは驚いたようだが剣で弾かれる

3本目…

こんどは足元に投げたが…ジャンプでよけられる…だが僕はコレを待っていた

4、5本目…

一つは頭、一つは腹に投げる…こうすれば上に跳んでいるため、剣で防がなければいけないが、頭と腹を隠せるような大剣ではないため、どちらかしか守れない。どっちを守るかといえれば頭しかないはずだ。

頭をガードしてくれば勝てる…そして予想通りのことが起きた

キンッ！

ブスッ！

「ガハッ！」

「…今っ！」

瞬時に体を動かし、相手の懐にアイスを撃つ。相手は頭をガードしていたために避けきれず、腹に当たる

僕は撃つた瞬間にビートラッシュの準備をしていたため次の行動

にうつす。準備が完了したビートラッシュをアイスを食らって苦しそうな顔をしていたボスに向かって放つ

「ウラアッ!!!」

「…ゲホッ!!」

ボスはそのまま倒れた…

- 20分後 -

「…ん?ここはどこだ?」

「ボスッ!気づきましたか!」

「おお、ところでここはどこだ?」

「ここは村長の家の前ですよ!」

「…思い出した」

俺が負けたんだよな…しかし…壱の刀だけで勝てたのはすごいと思う。俺でも無理だ…

「そつえば、あいつらは?」

「ああ、ボスが起きる1分前に、塗装屋にボウガンをとりに行ってくる…と言い残して「ただいま」」

「帰ってきましたね」

「あ、ボスさん大丈夫なの？」

「あ、ああ……」

「最後結構強く技あてたつもりだったんだけどなあ……」

「……結構効いたぜ」

「……それなのにもう意識があるってすごいな……」

「まあ、そこらにいる奴と一緒にすんなってこった」

「だな」

「まあ、結局おまえに負けたんだがな」

「いや……正直僕もきつかったですよ」

「冗談言つな、俺の天照をまともに食らって生きてる奴は初めてみたぞ」

「……あと5cmずれてたら臓器に支障がでました」

「……運もすごいな」

「……ちゅ……っ」

「まあいい、俺が負けちまったから約束通りに金をわたすさ」

「あ、じゃあそれをボスの治療費にあてていいよ」

「…それは別の金で払うさ、ほら」

渡されたのは一枚のカード

「その中には10万ほど入ってる…そのカードはあとは自由に使っていていいぞ。俺は別のカードがあるしな」

「あ、どうも…」

「あんた、見たところ勇者だろ？俺も戦いの最中に気がついたが…あんたの強さを見てさすがだなんて思ったぜ…ジャネットを倒せる實力だな…じゃ、俺はアジトに戻る」

「あ、ああ」

「頑張つて残りの八大魔族を倒せ。んじゃな」

そういつてボスは去っていった

- 村長の家 -

「んーさすがだっ！見事だったよ勇者君」

「どうも…」

「私は仕事に戻るから、君たちは勝手に忒の刀と壱の矢を読んで
てくれ。本は机に置きっぱなしでいいぞ」

バタンツ！

「…カイ君」

「…何？」

「あ、ありがとう」

「ん、どういたしまして」

そういつて僕たちは本を読みはじめた

第二十一話 ポスとの決着（後書き）

Warning

以下からはネタバレ要素が含まれます

この先のことを知りたくない方は決して見ないでください

カイ「前書きっ！おい作者っ！」

作者「何？」

カイ「前書きに書いてあること本当かよっ！」

作者「本当だ、ちなみに二章は100話だな」

カイ「何するんだよっ！」

作者「魔王と戦うためにだんぞんに行き、カギの破片を集めます」

カイ「言っちゃったよっ！」

作者「3章が準備から決着までです」

カイ「軽く言うなよ！」

作者「大丈夫、warningの文字を上に乗っけておいたから」

カイ「大丈夫か？」

作者「ちなみに3章の次もあるぞ」

カイ「おれどんだけ戦えばいいの!？」

作者「第二部は5章あるねー」

カイ「俺終わるころにはボロボロになってそうだ」

作者「だろっね」

カイ「すんなりいわれたっ!？」

第二十二話 初めてのクエスト（前書き）

また書いた後に保存していなかった…気をつけなければ

第二十二話 初めてのクエスト

式の刀…これを読んでから戦闘に行きたかった…と思いながらよむカイ

壱の矢…これを早く読んでカイの役にたきたい…と思いながらよむロミ

カイとロミはそんなことを考えながら本を読む

壱の矢は技が二個しかない

ボウガンの技は非常に技が少ない。理由もわかっていないが…四の矢は一個しか技がなかったりする

それでもないよりはマシだと思いつつ本を読み、イメージトレニングをするロミ

ボウガンの技の名前は

1、ポイズンショット…闇魔法で毒を作り、やじりに塗ってそれを飛ばす技

2、クロスショット…矢を同時に、2発飛ばす技…

この二つを使って活躍できるか…と考えているロミの横でカイは本を読む

式の刀は技が五個ある。

技の名前は

1、スパイラルカット…水属性の技で、切った範囲から水が飛ぶ技だ

2、瞬刃…壱の刀の疾風斬の範囲を広くしたような技

3、区切り…瞬時に移動し 型に斬る技だ

体まで可能な技だ

4、八刀一閃：前方の敵すべてに突きをする技、名前のとおり八
5、獄門：型に斬ったあとに、斬った範囲が爆発するという技
この五つだ。

カイが読んでいるとロミが言う

「早く技使ってみたいなあ…」

「んーそうだなー…僕が読み終わるまで待っていてくれ、ギルドに
いってクエストを受けよう」

「依頼の敵で技を試すって事？」

「そゆこと」

- 10分後 -

「終わった」

「んーいくのはもうちょっと待って」

「なんで？」

「今外にいるオオカミ狙ってる…」

「オオカミ？」

ロミが見ている窓の外には確かにオオカミがいた…しかも青いオオカミ…

マトウーには地球と同じような生物がいるが、地球ではありえない色や形をしているものが多くある…はつきり言つと気持ち悪い…
ロミは青いオオカミをスコープを通して真剣に見ている。もちろんオオカミはそんなことに気づいてはいない

「…今」

そついうとロミは引き金を引いた。矢は外にいるオオカミの頭を貫通し、もちろんそのオオカミは倒れた

「んー結構つかえるねー」

「ん、技使つてたの？」

「うん、ポイズンショットって言っただけど、瞬時に毒がまわる技なんだ」

「へー…一撃技？」

「いや…毒がきかないやつとか、しぶといやつは、死なないってさ」

「ふーん…」

「まあいいや、とりあえず行こつて…ギルドに」

「だね」

・ギルド・

ギルドにはクエストボードというものがある。クエストボードは、町の人が依頼の紙を張る場所。依頼を受けるにはクエストボードから紙をはがして、受付に持っていく。受付でランクの確認とその他の注意事項、報酬などを確認した後に受注は完了する。

「さて…ギルドに到着したけど…どんなクエストがあるんだろう」

「んーっと…薬草採取とか、オノマーク退治、オオカミ退治があるよー」

「んーじゃあオノマーク退治がいいかな…ロミ、これでいいよね？」
「赤、青オオカミ退治の依頼でよろしいですか？」

「はいっ！よろしく願いますっ！」

「ちょ、ロミッ！かってに決めるなよっ！」

「だつてえ…オノマークは強いもんー」

「だから試すのにちょうどいいじゃないかっ！」

「私そこまで強くないからやめておくよー」

「…しょうがないなあ」

「では、こちらのクエストでよろしいですか？」

「はい、お願いします」

「では、注意事項をお伝えします。場所はガリル北に生息している、青オオカミ、赤オオカミを合計で20匹倒してください。期限は3日後までです。報酬は、1万Gです」

「わかりました。」

「クエスト終了後にはオオカミ討伐数を確認させていただきます。それではどうぞ」

「あ、はい」

- ガリル北 -

「討伐数ってどうわかるの？」

「ギルドカードを死んだ敵の頭の上にかざすと、討伐数が記録されるんだよ」

「ふーん…二人の場合はギルドカードが分かれるけどどうするの？」

「二人で登録されるから、終わったときも二つのカードを受付に渡すんだよ」

「なるほどね」

一通り説明を聞いてから、オオカミを狩り始める…

- カイ視点 -

まずはそこら辺にいた赤オオカミに不意打ちで技をかけようとした…が音で気づかれてしまった。オオカミはすばやく突進してきて噛み付こうとしてくるが、盾で防いだ。その後は適当に防御をしながら、頭に剣を叩きつける。しばらくしたあとにオオカミが距離をとってくれたので、技を試してみる。

「ではまず…」

忒刀 - スパイラルカット -

水は直線に飛んでいき、オオカミを切り裂いた。オオカミはもちろぬ倒れ、死んだ…

「あ、ギルドカードギルドカード…」

オオカミの頭にギルドカードをかざすとギルドカードが一瞬光ってオオカミの死体が消えた。

「ハイテク…これも魔法なのかなあ？」

独り言をつぶやきながら次のオオカミを斬っていった

- ロミ視点 -

カイ君が地上でオオカミを斬っている間に私は木に登った。弓師は相手に気づかれないように攻撃するのが一番だ。急いで撃つとどうせ当たらないし…だから私はスコープ付のボウガンを買ってもらった。スナイプするためだ。相手に気づかれないスナイパーは、木があるところなら隠れるところはいつぱいだし。なかつたとしても遠くからなら相手に気づかれないし安全だ。だから私はスナイパー用のボウガンを買った

「・・・いた。距離約250M…」

まずは距離を測る。そのあとに相手の動きを確かめる…

「…寝てるし」

寝ているなら安全。簡単に撃てる。私はまだ使ったことがない…技を使ってみることにした

壱の矢 - クロスショット -

矢は2本飛んでいき、1本はオオカミの頭、1本は腹にあたり、そのままオオカミは倒れる…はずだったが。オオカミは倒れないで逆に起きてしまった。私は矢を10本入れてクロスショットを連発する。

- クロスショット x 5 -

10本の矢は2本は頭に、1本は足に、3本は体に、4本は地面にあたりオオカミはこんどこそ倒れた…

- 10分後 -

「いがいと楽だったねー」

「ねー、オオカミって弱いんだねー」

「何匹殺した？」

「んーっと…9匹ー」

「ん、僕は11匹だからぴったしだねー」

「それじゃ、ギルドに帰って報告しようかー」

- ギルド -

「9匹と11匹ですね。それでは報酬をお受け取りください」

「あ、どうもー」

「それでは、またのご利用をお待ちしております。ありがとうございました」

いました。」

「さて、ロミン、今日はどうする？」

「え？何を？」

「泊まるところ」

「あー…：適当に宿屋をさがそうか」

「了解」

こうして僕たちはたまたま一部屋だけ空いていた宿屋に泊まらせてもらった…

第二十二話 初めてのクエスト（後書き）

カイ「注意しようぜ、前書き。」
作者「だなあ。」

第二十三話 休憩タイム（前書き）

1時間半で書き終えたー…うん、疲れた。
月曜日と木曜日更新でいいやーってことにした。

第二十三話 休憩タイム

旅立ってから3日目の朝…

多分今は8時くらいだろう。ロミは…きっともう食堂だろう。部屋にいないからね…

部屋の外に出るとロミがいた

「あ、おはようロミ」

「おはよー。今日はおきるの遅かったねー」

「んー疲れが残ってるからかな…ちょっと飲み物かってくるー」

「いってらっしやーい」

宿屋を出ると前に武器屋があり、その隣が雑貨屋、さらにその隣が食料品店…と、店が並んでいる。

僕は飲み物を買いにきたので、食料品店に行く…と

「…営業時間は10時からだよ…」

開いていなかったなので、隣の雑貨屋に行く。空き瓶を買えば外の水道で水をとれるからだ。この世界にも駄菓子屋というものがあるらしく「粉ジュース」なるものもあるらしい。ちなみに「粉ジュース」は、水の中に粉を入れると、コーラ味になったりサイダー味になったりするやつだ。

雑貨屋に行き空き瓶を買って、水を入れた後、駄菓子屋に行ってみると

「あ、あいてた。おはようございまーす…誰かいますかー？…返事がない…あ、レジに紙が張ってある…えーっと…」おばちゃんは風邪を引いたため店に出れません。お金はこの箱に入れてください。監視カメラが数百個かくれて…って数百個！？多すぎだろう！…まあいいや、数百個隠れているので、盗んだらばれます。盗みはしないように。 - 駄菓子屋のおばちゃん - 『…どんだけあるんだよ…って…数百個まとめておいてある気がするけど気のせいかなあ…』

レジに数百個カメラが置いてあるのである。…どっから持ってきたんだよ…

「とりあえず…あ、あつたあつた、粉ジューズ発見、発見…一個50Gか…高い気がするけどいいや、20本買っちゃえー」

とりあえず1000Gを箱に入れて店を出て、宿に帰る

部屋に行ってみるとロミが宿を出る準備をしていた。

「…早くない？」

「いいのいいのー今日はドスマークを倒して次の村、「ローレック」に行くんだからー」

「無理無理、そんなことできるわけないって…今日は休んで、明日倒しに行こつ」

「えー…しょうがないなあ…」

「宿の人にもう一泊してくるって言うてくるー」

「あ、こら…もう…この部屋汚いから嫌なのにい…」

「野宿よりましっ!」

受付に行き、もう一泊の手続きをした後、ロミと相談して今日は町にでて散歩することにした。

準備がおわり、町へ出てみると…

「んーティナイルにくらべると町が小さいねー…」

「確かに…ティナイルはこの2倍の大きさだよな…」

「まあ、家が少ないからね…こっち」

「だね。あ、武器屋によって行こうよ」

「なんで?」

「すこし武器強化しようよ」

「そっか、行こう行こう」

- 武器屋 -

「どつですか?」

「んー…ボウズが使うには重そうだな、軽量化するか?」

「お願いします」

「そっちの娘がもってるボウガンも、弓の弦の強化とティラーの強化をしたほうがいいなあ」

現在武器屋のおじちゃんに武器をみてもらってます。どう強化するかも、おっちゃんが決めてくれるのでとても楽です

「ん、わかった。ボウズの持つてる剣は軽量化と、焼き入れ、効果は…切れ味がよくなって攻撃力が上がるな…かかる費用は6400Gだな。いいか？」

「それでいいですー」

「嬢ちゃんのボウガンは弓の弦の強化とティラーの強化だけどいいか？費用は5800Gだ」

「はい、それでいいー」

「了解っ！合計12200Gだ！金はあるのか？」

「べつぞー」

「OKだっ！今日の夜にでも取りに来てくれっ！それじゃあなっ！」

「べつもありがとついでいますー」

「思ったより安かったねー」

「だねー元が高いから強化も高いと思ってたよー」

「うんうんーあ、衣料品店発見！なんかいい服ないかなーって探していたんだよねー」

「あ、いいよーそうだな、僕も服買っておくかな」

・衣料品店・

「こちらの服はどうですかー？」

「うわっ！かなりかわいっ！この服いいねっ！いくらですかっ！」
「？」

「こちらは冒険者さん専用価格で29800Gです」

…日本のような値段だ…398もあるのかな…

「カイ君っ！買っていいっ！？」

「ん、いいよーまだお金はボスからもらったお金があるしねー」

「ありがとうっ！ー」

「では、こちらの試着室でどうぞー」

「はいっー！」

んーどんな服選んだんだろうっ…気になるなあ…まあ買えばいくらでも見れるからいいやつ！

「さてと…僕も服を探すかな…」

冒険者用ってかいてある所に行くっ…

「すごいっ！なんかかっこいいっ！」

見るとそこには、自衛隊のような服装や、探検家が着ているような服とかがある。

「すごいなー…あ、これいいかもー」

物を入れるポーチがついていて、服の裏にも内ポケットがついているという、ポケットだらけの服だ

「値段…398だっ！…買おうっ！試着室で着てみるかな」

398の服を持って、試着室に向かうっ…

「あ、カイ君、どうっ？この服っ！」

見ると、そこには前のロミと比べてとてもかわいくなったロミがいた。

「…すごくかわいくなったと思うよっ!」

「本当っ!?!ありがとうございます!」

「あ、店員さん、この服も試着させてもらっていいですか?」

「あ、では、どうぞこちらの試着室をお使いください。」

「どうもー」

- 5分後 -

「着替え終わったよー」

「みせてみせてー」

「はい…どう?変じゃない?」

「うわっ!すごっ!前の服よりこっちのが絶対いいっ!すごくかっこよくなった!」

「よかったー…この服は僕も気に入ったなー」

「私もー」

「ん、じゃあ、お会計をお願いします」

「はい、えーっと69600Gです」

「はいどうぞー」

「確かに、ありがとうございますー」

「あ、服はそのまま着て行っていいですか？」

「どうぞーあ、冒険者さんのために手を防御するガントレットを5000Gでお売りしているのですが、どうですか？」

「どうする？ロミ」

「私はほしいかな」

「んじゃ、二つお願いします」

「わかりましたー」

そのまま僕たちはガントレットを買い、店をでて、昼になっていたので、食堂で軽く飯を食い、そのまま散歩にでかけた。

夕方になって武器屋にいった武器を返してもらってから、宿屋に帰ると、部屋がきれいになっていた。たぶん宿主がきれいにしたんだろう。とりあえず夕飯を食べて寝た。これが3日目の旅だった

第二十三話 休憩タイム（後書き）

作者「今日はつかれたー…」

カイ「あ、服買ってくれてありがとうー」

ロミ「ありがとうー」

作者「いやいや、設定的な意味で服変えないとだめだったんだよね

w
」

カイ「設定的な意味って？」

作者「この物語のストーリーや、マップなどが書いてある秘密の赤いノートの最後のページに、カイと、ロミと、これから登場する二人の絵を描いたんだよ」

ロミ「それで、服をかえたと？」

作者「そゆことー」

カイ「秘密の赤いノートってほかにはどんなことが？」

作者「マトウーのマップ、魔法と剣、ボウガンの技の名前、君たちが持っているアイテム、装備、登場人物、ストーリー、敵の名前などだ」

ロミ「よく書けたね」

作者「これを書くのはとても楽しいのだが、小説を書くのはだるい

w
」

カイ「がんばれww」

第二十四話 オノマークの住処まで

今日は4日目の朝だ…今日は、昨日ロミと約束したため、オノマークの住処に行こうと思っっている。

オノマークは基本的に群れで住処を作り、そこで生活する。外へ出ているのはオスのオノマークで、外にいる野生の動物を狩ったり、冒険者を襲ったりする。メスのオノマークは、住処の中で子供の世話や、オスが狩ってきた動物の肉や、冒険者たちが持っている、非常食などを、昔村に住んでいた人の道具を使い、火を起こしたりして、料理をしている。また、オノマークたちにはそれぞれの群れのボス…人間で言う、村長、市長的な感じの役割のやつがいる。さらにその上に、オノマーク全体をしきっているボス、《ドスマーク》がいる。ドスマークは八大魔族で、ジャネットより知能が高く、相手の行動を予測したりするため、注意が必要。また、体長は1.5Mくらいで、僕の身長と同じくらいだそう。オノマークは1Mくらいの身長なので、きつとすぐわかると思う…と昨日の昼行ったギルドで言われた…い、今は受け売りなんかじゃないよ？

…とりあえず、話を続けよう。昔、ドスマークと戦った戦士がいたんだが…結局相打ちで帰ってきた、戦士は衰弱して帰ってきたそうなんだが、これからドスマークと戦う人のために、いろいろの特徴などを言い残して、この世を去ったという…だが、相手の攻撃方法などとも知ることができたため、結果的には大きな進歩だった。その戦士によると、ドスマークは、武器を使って攻撃してくるらしい。武器は多種多様で、相手が近いところにいると、剣で、少し離れたところにいると、ランスで、ランスも届かないところに行くと、ピストルを使ってくるらしい…ドスマークは、忒の刀まで覚えているらしい…しかも、手下をつかって攻撃することもあるらしい…つまり倒すのが難しいですね、わかります。

昨日の夜、ロミと相談したがロミが手下を倒し、僕がドスマーク

と戦うことになった。…大丈夫かなあ…ちょっと不安も残るが、と
りあえず準備をする。

「カイ君ー昨日もらったショートソードはどこにいれとく？」

「ん、腰につけていくよ」

「了解ー」

話でわかったと思うが、昨日、それぞれの武器をとりに行ったと
きに、カイなら接近のときに予備があったほうがいい、とショート
ソードを2本もらった。ロミは、力がなくても扱える、ククリをも
らった。(正確にはシミター)カイとロミはいつでも出せるように
腰につけることにした。

「これで少し安心だねっ！」

「んーそうだねー、でも練習してないからね、今日使うのは、本当
に、やばくなつた時だね」

「そっかー残念だねー」

・ガリル、ギルド・

ギルドに行くと、大勢の人がいた…きつと冒険者だろう。ギルド
の人にしか、僕たちが今日ドスマーク退治に行くということを伝え
てないからね…

「あつ！お前か？ドスマーク退治に行くって言うのは！」

「おお！本当にちびっこだ！」

「なんでもテイナイルから勇者として召喚されたらしいぜ！」

「マジ？だから村長の娘もいるのか！」

「え？あれ村長の娘なの？超かわいくない？」

など…どうしてそこまで集まったのかな…だれだろう、広めたやつは…ロミは顔を赤くして照れている…あ、最後のかわいいって言葉か…

僕たちがギルドに来た理由は、オノマーク退治クエストを大量に受けるためだ。オオカミで自信がついたロミは、オノマークもへっちゃらだって言ってたからね。だから、ドスマークを倒すついでに手下がいっぱい出てくることを予測して、どうせなら儲けちゃえつてことでクエストをうけることにした。

「はい、ではオノマーク退治クエストでいいですね？報酬は、オノマークを倒した数×500Gです。」

「わかりました、ロミ、早く行こう。」

「了解っ！」

- ガリル北の森 -

オノマークの住処は、樹海の中にある…樹海と言つことは、とても強い敵がでてくる…と思つてた…が、本当は違つた…

「ねえ…ただ森があるだけって感じじゃない？」

「確かに…しかも僕たちが進んでいる方向なぜか木がないから…たぶんオノマークたちが切ったんじゃないかな…」

「あー、迷わないためについてこと？」

「そうそう」

「じゃ、ここから先に行けば住処があるの？」

「だと思っよ」

・オノマーク住処入り口・

「これが…オノマークの住処かあ…」

「んー、おんぼろ屋敷だねえ…」

オノマークの住処まではまったく敵が来なかった…たぶん凶暴なオノマークたちに殺されたんだと思うけれどね…だから、難なくここまでこれた

オノマークの屋敷は、本当に廃屋で、今にも壊れそうな感じだ…が、庭も広く、もしかしたら貴族が住んでいたんじゃないかなあ…と思

う。(別荘的な感じで)

「ロミン、行く準備はできてる？」

「もちろん！」

「じゃあ……ドスマーク退治に……」

『……ゴッソリ』

第二十四話 オノマークの住処まで（後書き）

カイ「テストいつ？」

作者「明日、月曜、火曜」

ロミ「…明日？」

カイ「…テストがんばるとかいつてなかった？」

作者「ねー」

カイ&ロミ「…」

カイは 作者に…

作者は 逃げた

カイ「…って逃げるなー！」

第二十五話 カイ&ロミVSオノマーク(前書き)

思っんだが、3、4日でこの文字数ってなくね？w

第二十五話 カイ&ロミVSオノマーク

おんぼろ屋敷に入ってみると、そこには約500対ほどのオノマークと、一番奥に背の高いオノマークがいた。相手は僕達がいることは分かってないようだ

「…ロミ、この数…戦える？」

「む、無理かも…」

「けど、僕がドスマークと戦ってたらロミしかいなくなるよ？あれと戦うの」

「…どこかに隠れるところない？」

「隠れるところ？」

「隠れるところがあればスナイプできるじゃん」

「あーなるほど。それならそこにある岩動かせば？」

僕が指したのは近くにあった大きな岩。ちなみに岩があるところには、木があつて、スナイプできない。その木の上からだど、上げて屋敷の中に矢が入らない

「そうするとあいつらが気づくんじゃない？」

「んー…作戦たてよう。僕がドアのところまで戦いながら、ロミが岩を移動させるっていうのは？」

「無理。私そんな力ないもん」

「んー…二人でならできそうだけどなあ」

「あ、じゃあ二人で押して気づかれたら俺がドアの前に行くっていうのは？勢いつけければロミだけでもいけるんじゃない？」

「んー…そうするしかないもんな…」

「よし、それで行こう」

まずは岩を押してみる。…意外と軽かった

「ロミ、一人じゃ無理？」

「ん…いけそう…」

「了解、僕は中にいつてるから！」

「がんばって…ねっ！」

・カイ視点・

ロミの返事を聞いてから僕はドアを勢いよく開けた。するとオノマーク達は一斉に僕たちのほうを向いた

『ガッ!?!』『グギヤア!』

オノマークたちは急いで武器を取り出し、僕のほうに向かってきた。

僕は正面からきた、剣を持つてるオノマークを斬り、そのまま左にいたオノマークを斬る。…まず2対1！

そのあと投げナイフを準備して風を纏わせて、弓で狙ってるオノマークを倒す。10対くらいいたので10本使ったけど…

前をむくと5対ほどオノマークがいた。…5対1気は結構きついので技を使う。

式の刀・八刀一閃・

『グギヤアツ！』

突かれたやつは苦しみながら倒れた。しかしここにいるやつら弱すぎないか？前、ガリルの門の前にいたやつはもっと強かったよう…

よく考えてみると、中にいるのはメスのオノマークだけ…前はオスだったから強かったのか？

考えているといつの間にか困まれていた…こんなときは…

式の刀・区切り・

瞬時にオノマークの壁から脱出し、その壁を 型に斬る

『ガゴツ！？』

さらに、この部屋全部の敵に攻撃するために…

風魔法 - トルネード -

部屋全体に風が入り、オノマークたちを斬りまくる。

『グギャツ！』『アアアアアアア！』

悲鳴を上げながらオノマークは倒れた…ただ一匹を残して…

- ロミ視点 -

カイ君のほう…とても静かになったきがするけど…もしかして全部倒した？私がスコープで中の様子を見ると、予想通り全員倒れていた。

結局私はすることがないのかなあ。なんて落ち込んでいるとどこからか足音が聞こえてきた…岩陰に隠れながら見るとそこには…大量のオノマークがいた…それも、約100対…

私はボウガンを構えて、先頭にいるオノマークを撃った…がきかず。相手に場所を特定されてしまった…

そこで、私は技を連発することにした…

壱の矢 - クロスショット -

右手でボウガンを構えながら撃ちまくり、左手で矢をどんどんセツトしていく…オノマークたちはけっこう苦しんでいる？のかな…私はさらに撃ちまくるけど…これマナの消費はんばないっ！

私のマナの量は約300。けっこう普通なんだけど…クロスショットは1回にマナを3つかうため。100回しか使えない…仕方がないから私用に作ったマナポーションをがぶ飲みしながら撃つこと

にした…

オノマークは次々と倒れていくけれど、まだ50対はいる。しかも、後ろのほうにはまだオノマークがいる…あわせて約200対…さすがに一人じゃ無理と判断した私は逃げようとした…後ろを向くとそこには…

「オ、オノマーク!？」

『グガアアアアア!』

回り込まれていたのか…気づかなかったわ…私は腰にあるシミタ―を抜き、オノマークを斬る。だけれど相手はオスのオノマーク。一回斬っただけじゃ死なない。私はオノマークに向かって、ボウガンの矢を手で刺した

『ギヤ!?!』

予想外の出来事だったのか、オノマークは仰け反った。私はその隙を逃がさず、剣で相手の腹を刺した…

もちろんオノマークはそのまま倒れた。

けれど安心してはいけない…まだ200対ほど…あれ? 大群がいた方向を見るとなぜかオノマークは一对もいなかった…けれど、そこには一人の男が立っていた…

「これくらいかな?もういなさそうだけれどね…しかし僕になんの危害も加えられないとか…もっと強いやついないのか?」

私はとりあえずその人のところに行く。その人は私に気づいたけれど…そのまま男は去っていった…

「なんだったんだろう…でも、すごい強さだよな…しかも倒したオノマークを回収してないし…ま、こっちの利益…戻ってきた！」

「はあ…その子、ちょっとオノマークの死骸集めるの手伝ってくれない？」

「え？私が？」

「そうそう、僕ちょっと用事があるから…カード渡すからちょっと集めておいてくれ…たしか217対いたはずだから盗んだらばれるよ？このカードはこの岩の上に置いておいてくれ。それじゃ」

「あ、ちょっとっ！…ま、いっか…そういえばランクいくつなんだろう…えっ！？」

見てみるとそこにはランクSと書いてあった…何者なんだろう…

- 再度カイ視点 -

「…外のほうも終わったみたいだね」

『だな』

オノマークと違ってドスマークは、ちゃんとした言葉を話すことができるらしい

「こつちもはじめるか？」

『…ああ、お前は一人で僕様を倒すことができるか？』

「わかんね」

『力はさっきの手下でわかった。僕様と同じくらいの力かな』

「へえ。魔法はどうか」

『そつちのが強い、が頭は僕様のがいい』

「そつか」

『ああ、前に来たやつも、行動が簡単に読めた。だから俺は勝てた』

頭脳ねえ…武器の種類も多いようだし、少し厄介だな…

『そついえば、僕様と戦ったやつはどうなった？』

「死んだよ、確か帰ってきてすぐだったかな」

『フン…そらそつだ…俺の剣には…毒がついているしな』

「毒？」

『結構やばい毒だ。一時間以内に解毒すれば人体にはまったく影響はないが…二時間たつたら…』

- 八大魔族を倒すくらいの能力は消える -

「…つまり、もう戦うことはできないと？」

『いや…だが僕様のような、魔族と戦うことはできないな…ああ、ジャデツパぐらいは大丈夫かな』

「…一応聞くが、生活に支障はでるのか？」

『三時間くらいででるんじゃないかね？まあその先は知らないが…解毒しないならそれから24時間以内に死ぬ』

「…そうか」

『ああ、そろそろ始めるか？』

「一つ知りたいことがある」

『なんだ？』

「お前は俺がジャネットを倒したことは知っているのか？」

『ああ、魔王にも伝わっている。』

「…そうか…俺の平和な生活はもう帰ってこないのか…」

『魔王を倒さないことには無理だろうな…だが、魔王はお前より強い…たとえお前が伍の刀をおばえたとしても、マナが一万を超えていても…お前が魔王を倒すことができない』

「…せいぜいがんばるよ」

『フン…行くぞ…』

「…勝負！」

第二十五話 カイ&ロミVSオノマーク(後書き)

カイ「前書き…確かに…」

ロミ「作者、やる気ある？」

作者「ない」

カイ「はつきり言うなよ！」

ロミ「そういえば、あのランクSの人誰だったんだらう」

作者「…教えておくか」

ゴニョゴニョゴニョ

ロミ「マジ？ってか設定キモくない？」

カイ「そいついじめる役だねさ」

作者「君たちでいいよ。そいつマジだから」

カイ&ロミ「了解」

作者は何と言ったんだ!？

今実は考えてないだろうって思ったやつ。なわけがない……ちゃんと考えてますよw

秘密の赤いノートにも乗ってますしね。

ヒント出しましょう。「次の村」&「剣士」

第二十六話 カイVSドスマーク(前書き)

4千文字に挑戦!…! けっこうな時間を費やしてしまった! W

第二十六話 カイVSドスマーク

『フン…行くぞ…』

「…勝負！」

僕は相手の力量を見るために、適当に壱の刀を放つことにした。

壱の刀・ビートラッシュ・

剣の波動はドスマークに向かって飛んでいく…が、ドスマークは、剣で叩き斬るのではなく、瞬時に体を捻りよけてしまった…ほぼ骨だからかもしれないが、人間ではありえない動きをした…

だから…今のでわかったことは、早い攻撃じゃないとドスマークは効かないという事…だとすると…この技だっ！

壱の刀・疾風斬・

瞬時にドスマークにグラディウスを向け、突進する。

『…甘い』

「っ！」

突進しているときにいつのまにかランスを構えられていた…これでは奴に突進しても、俺が死ぬ…でも俺は突進はやめない…なぜなら…ここで突進をやめると、相手の距離が、微妙な距離、つまり、相手が突進したら、俺がすぐ殺されてしまう…だから、ランスが届かない距離…つまりゼロ距離に近づき、相手に攻撃を食らわす事に

した…すると、ランスをよけなければいけない…だから俺は、瞬時に自分に魔法をかける。

- 闇+光 闇隠し -

自分で作った技だが…この技は自分の姿を、闇で隠す技だ。光で、毒を消すため、自分に影響はでない。これなら相手の懐に、難なく入れると思った。

『…何?どこに行った!』

ドスマークは予想通り俺を探している…俺はオノマークの後ろに回りこみ…

「ここだよっ!」

『クッ!』

式の刀-獄門-

ドスマークの周りを一周し、そのまま爆発させる。…だが、爆発の中心にはドスマークはいなかった…

『チッ!』

「…何!?上だと!?!」

ドスマークは天井でピストルを構えていた…もちろん銃口は僕に向けられていた…僕はカイトシールドを構え、ポーチにある投げナイフ50本すべてにマナ50を使い風を纏わせる…

ドスマークも、僕が出てきてからすぐ、ピストルで撃つつもりのようにだから…僕はその弾を相殺するように投げナイフを投げなければいけない…僕は5本の指に4本ナイフを持ち、盾から出て投げる…ドスマークは投げてくるとは思ってなかったみたいで一瞬間惑う…が、すぐ我にかえり4発の弾を撃った…僕はその隙にドスマークの弾があたらない場所に逃げる。するとドスマークは天井から降りてきた…僕は今いる場所から投げナイフを投げて、ドスマークに当てようとした…だが、相手も、そのまま上に跳び僕のほうに来た。僕はドスマークから逃げたときに実は魔法を唱えていた…

火魔法・フレイム・

フレイムはドスマークが居たところに着弾。そのままドスマークは火に包まれた…

僕はドスマークに勝った…しかし、なぜか実感がわかない…ここまで簡単に倒せるわけがない…しかし、ドスマークは火に包まれ…！火に包まれたあとのドスマークの骨は、1Mくらいの身長だということに気がついた…これは…ドスマークの死体じゃない、手下オノマークの死体だ！ドスマークが身代わりに使ったんだ…

僕がそのことに気づくと、どこかから狙われている感じがした…だが、それに気づくのは少し遅かった…

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！』

「グアアツツツ！」

いつの間にか僕の後ろに回りこんでいたドスマークは、そのまま持っている剣で僕の首を切ろうとした…

ドスマークの剣はもう首に迫っている…もうダメだ…俺は死ぬ…そう思った…だが！

『グアッ!』

悲鳴を上げたのはドスマークだった…

その隙に僕はドスマークを蹴りドスマークから離れる…逃げた先には…ロミがいた。

「今の…ロミ?」

「うん!大丈夫?カイ君」

「うん…ありがとう、ロミがいなかったら死んでたよっ!」

「どういたしま『戦いの最中に駄弁ってんじゃねえ!』」

「!?!?」

待つてくれてもいいじゃんか…と思いながら突進してくるドスマークに投げナイフを投げる

そのまま僕はドスマークに向かって技を放つ…

弐の刀 - 獄門 -

ドスマークは今度は素直に爆発に飲み込まれた…だが、ドスマークは倒れない…僕はさらに技を放つ

弐の刀 - 瞬刃 -

ドスマークに向かって突進するが…ドスマークは死なない…

『フハハ…ハツハハハ…無敵の俺に勝てるわけがないじゃないか…
クヒヒ…ハツハツハツハ…』

「ロミ…こいつ…壊れた?…」

「…壊れてる…」

『こんどはこっちのターンだ…行くぞオオオオオツツツツ』

弐の刀・スパイラルカット・

「っ!?!」

僕は盾で瞬時に防いだが、水の勢いで吹き飛ばされてしまった。

『まだまだっ!!』

壱の刀・疾風斬・

「早っ!」

相手の速さを予測していなかったからまともに食らってしまった…

「ガハッ!」

「カイ君!」

「へ、平気…でも…!」

『最後ダアアアアアアアアアアアアアアアアア』

式の刀 - 獄門 -

「ロミ！斬るんだ！」

「え、ええ！？」

「早く！」

「う、うん！」

キンッ！

ロミはギリギリの所でシミターを振り、ドスマークの剣を叩き落す
そのまま俺はオノマークに向かい剣を振る…

式の刀 - 八刀一閃 -

僕はドスマークに向かい剣を突きまくる…ドスマークは…生きて
いる…

ロミもクロスショットを使い、ドスマークを倒そうとしている。
しかしドスマークは死なない…

ふと自分の剣をみると、なぜか光っていた…僕はそこにマナを通
した…なぜか、そうしないといけないと思った

僕の剣、グラディウスはそのまま光を強くする…マナを流すごと
に明るくなってゆくグラディウスはついに…光を纏う剣となった…

僕はそのままグラディウスを振った…ドスマークは、あっさりと
斬られ…そのまま倒れた…

そう、今度こそ僕はドスマークに勝った…僕が持つ光の剣で…

僕はドスマークの首を切り落とし、闇で圧縮し、ポーチにいれた…
ロミは、何が起こったかわからない…という顔をしていた。そり
やあそつだ…なにをやっても倒れなかったドスマークが、いきなり
光り始めた剣がいと簡単に斬ったのだから…

僕も何が起こったかよくわからない…僕はあとでギルドで見ても
らうことにした…

「…ロミ」

「…」

「ロミ…?」

「…あ、ごめん…って、カイ君!今の何!??」

「…僕もわからない、とりあえずギルドについて調べてもらおう」

「そ、そうだね…」

「でも…まずはオノマークの死体を…ギルドカードに記録しないと
…」

「あ、ギルドカードに登録といえばカイ君がドスマークと戦ってい
る間に、ランクSの人が来て、外にいるオノマークを全部倒しちゃ
ったんだよ!」

「ランクS? 4、5人しかいないんじゃないの!??」

「うん！一瞬でオノマーク200対を倒しちゃった！」

「へえ…すごいな…でもギルドカードと関係なくない？」

「倒し終わったあと、用があるとかで、ギルドカードにオノマークを登録して、置いておいてくれ。ってギルドカードを渡されたんだよ。」

「そこにSって書いてあったのか」

「うん！しかも、倒したオノマークの数まで数えてたみたい」

「そんな余裕まであるのか…すごいな…Sランクって…」

僕たちはそんな話をしながら町へ戻った…

ガリル・ギルド・

「はい、オノマークを…548匹！？…あ、ごめんなさい、548匹倒したので、548×500で…に、274000Gです…少々お待ちください…」

「…ロミ、なにその大金…」

「すごい…」

周りにいた人たちも驚いていた…まあ当たり前だけれど…

「こちらでございます。またのご利用をお待ちしております。(っ
て誰が待つか…こんなんじゃギルドがつぶれちゃいます…トホホ)」

「あ、ど、どうも…」

「カイ君、とりあえず村長の家に行こうよ」

「あ、そうだね、じゃあとりあえず今日の宿を取ってから行こうか」

・村長の家・

村長の家に行ったら、村長がすぐ出迎えてくれた。ドスマークの頭を見せると、泣きながら喜んでくれた。

「君たちならできると信じていたよ！ガリルのために戦ってくれてありがとう！」

「ど、どうも…」

しかも、お礼に、と行って。なんと昔ドスマークと戦って、負けた人が持っていた剣をくれる、というのだ。そのお礼ならほしいかなーなんて思い、お願いします。と言った。

村長が持ってきた剣はバスタードソード2本。バスタードソードは、グラディウスよりも長く、2kgほどあるものだが威力も高く、ぜひ、持って行ってほしいと言われた。

さすがに2本はいらなかなーなんて思って、1本は、大切にし

まっでおいてください。と言うと、仕方なくまた倉庫にしまいにいった。

もらったバスタードソードを見ると、とても長く、両手剣といってもいいほどだが、両手剣よりは軽く、二刀流もできそうだった。ためにグラディウスとバスタードソードで二刀流をしてみると、いがいと振ることができた。…そういえば光の剣についてギルドで聞くの忘れてた…

村長が帰ってくると、アドバイスとして、次に行く村の事と、八大魔族の事を教えてくれた。

次に行くローレックは、ガリルと同じくらいの大サイズの村で、村長の家には弐の矢の書が眠っていると聞いた。それと、ローレックには腕の良い鍛冶師が居るそう。光の剣も、そこで聞けばわかると言われた。

ローレックは比較的海が近いため、海産物がおいしい…と言っていたが、それは関係ないのでスルーしておいた。ガリルからローレックには約10時間ほどかかるらしい。途中、ゴブリンに襲われることがあるそう。

ローレック周辺を仕切っている八大魔族は巨大なゴブリンらしい。ゴブリンは、力がとても強く、攻撃されればそれなりのダメージはくるそう。だけれども、HPは低いため、簡単に倒せるそう。巨大ゴブリンに関しては、知能も低い、硬い肉と、皮で覆われているため、倒すことは難しいそう。

散々お礼を言われた後、僕たちは宿に帰った。

「ロミ、今日どうだった？」

「なんかぜんぜん役に立てなかった気がする…」

「そんなことないよ、ロミがいなかったら僕は死んでたよ？」

「そ、そうかな、あ、ありがとう」

「ありがとうはこっちだよ！本当に助けてくれてありがとう！」

「どういたしまして」

・翌日・

今日は町を出る日だ。

とりあえずガリルを出て、早く残りの八大魔族を倒したいので、僕たちは今日でることにした。

村長の家に挨拶に行く…」

「もう行ってしまふのか…もっと居てほしかった…」

と、残念がられてしまったがしょうがない…

僕たちがガリルをでる時には、小さな人数だったけれど、見送りに来てくれた。

「この町を救ってくれてありがとう！」

と、何度も言われた。

・ガリル東の森・

「ロミ、あの村って暖かい人たちがいっぱいだよかったね。」

「うん でも謎が一つ残ったよね…」

「うん？」

「あのランクスの人誰だったんだろう？」

「…ま、いつかまた会えるでしょ！」

「そっだね！」

その言葉が、その数日後に起こるとはカイ達も予想していなかった…

第二十六話 カイVSドスマーク（後書き）

作者「お疲れ様ー」

カイ「んーどうも」

作者「そうそう、この次の話は番外編として作者、カイ、ロミ、フランクリで雑談&インタビューをしたいと思います」

ロミ「なにそれ聞いてないんだけど…」

カイ「しかもジジイまで？」

作者「うむ、では次の話を楽しみにしてくれ」

番外編一 カイとロミと作者とジジイの雑談&インタビュー(前書き)

予定通り番外編として雑談をします。

番外編一 カイとロミと作者とジジイの雑談&インタビュー

カイ「それでははじめますー」

ロミ「はい」

作者「ってか、コレ読んでいる人の半数以上が、本編よりあとがきのおもしろいって言うってどういうことw」

カイ「さあww作者に文才がないからじゃね？」

作者「…」

ロミ「そういえばジジイは？」

カイ「テーブルの下、ロミ、いまだ！蹴れ！」

・ロミの護身術作動・

フラ「グボハア！」

カイ「気づけよ…こいつスカートの中か見てたぞ」

ロミ「!?!」

伍の矢 - f … -

作者「やめれ、ネタバレになる！」

ロミ「じゃあ、壱だけ？」

カイ「壱ならいいんじゃない？」

ロミ「わかった」

壱の矢 - ポイズンショット -

カイ「鬼畜ーw」

作者「カイ、よく見る、ボウガンには10本の矢が！」

カイ「あー、ジジイ死んだな」

作者「見守ろっぜ」

フラ「ぐわああああああああああああああああ（ry）」

作者「…死んだか？」

ロミ「いや、手、足に10本だから、死んでないと思う。カイ君、解毒薬ちよーだい」

カイ「ん、ああ、はい」

ロミ「どうもー、じゃ、飲ませて…もう一回」

作者「とりあえず矢の分の血（HP）は？w」

カイ「回復ポーションの準備しておこう」

作者「適当にやっついていいよ」

カイ「机の上にポーションとか置いておくから」

ロミ「了解」

作者「では、本題に入りましょう」（バック）「サクッ」「んぎ

やあああ（ry）」

カイ「何でしょうか」（バック）ゴキユッゴキユッゴキユッ…

作者「カイ君にインタビューです」（バック）カコッ「サクッ」

「ngy（ry）」

カイ「はい」（バック）ロミ「あ、死にそう、ポーション…」

作者「…集中できない」

ロミ「あ、ごめんね じゃ、ちょっと隣の部屋借りるねー」

カイ「あ、はい」

作者「いつてらっしやい」

ボタン

作者「えーっと、カイ君にインタビューです。勇者の仕事は疲れますか？」

カイ「んー、そこまで大変ってわけじゃないけれどーなんか自分が戦うっていうか、やっぱりまだ、「これが、現実だっ！」って言う感覚がつかめてないです」

作者「がんばってください。次、ロミはどうですか？」

カイ「…なんか、あっちがお姉さんのときもあったり、妹になったり…なんだろう、とてもしっかりしているって感じ」

作者「うんうん、確かにそういう設定だ」

カイ「そういう設定なんだw」

作者「次、フランクリについてどう思いますか？」

カイ「キモくて、ウザくて、KYで、変体で、ロリコンetc」

作者「つまり、ロリコン変体ジジイですね」

カイ「そうです。」

作者「次、光の剣については？」

カイ「早く謎を明かしてほしいです」

作者「ローレックまで待ちなさい」

カイ「腕のよい鍛冶師？」

作者「それぞれ」

カイ「楽しみにしよう」

作者「最後、第二十五話までできた、謎の男については？」

カイ「あとがきで説明してくれたやつでしょう？」

作者「そうそう、どう思う？」

カイ「あの設定はいらなと思う」

作者「んー…ジジイ的なやつを入れようかと思いましたが」

カイ「あ、なるほど」

ロミ「確かにそうだね、こんな感じで縛って、殴って蹴って喜ぶ変体は、いたほうがいいね。(ストレス解消用)」

カ&作『ちよ、何その雑巾！汚れているから捨てちゃいなさい！』

ロミ「スミマセン、じゃ、ゴミ置き場に捨ててくるね。あ、それと、あの部屋では伍の矢使いまくったから」

カイ「鬼畜…ま、いいや、いってらっしゃい」

作者「はい、カイ君にインタビューは終了です」

カイ「あ、僕からも作者にインタビューしたい」

作者「どうぞ」

カイ「なぜ、この小説を書いたのですか？」

作者「んー…いろいろな人の小説を読んで、自分も書きたくなっただってという感じ。あ、あと、がkk（カイ）それ以上はいつちゃダメ！」

作者「スミマセン」

カイ「2番目、僕の名前はどこから？」

作者「適当です」

カイ「おいw」

作者「キーボードで適当に打って、でた、ひらがなを並び替えました」

カイ「なんという…」

作者「すみません、適当な決め方で」

カイ「最後、マビノギからパクっているのはどこから？」

作者「敵の名前と、町の名前」

カイ「どんな風に？」

作者「敵の名前は、青オオカミとか、そういうのがいるので、パクってます」

カイ「町の名前は？」

作者「町の名前を合成」

カイ「例として」

作者「ティナイル+ティルナノイ+ティルコネイルかな」

カイ「マジですかw」

作者「マジなのです」

ロミ「ただいまー」

カイ「おかえりー」

作者「ゴミ捨て場にちゃんと捨ててきた？」

ロミ「背負い投げ風に捨ててきたよ」

カイ「頭は？」

ロミ「ゴミの中に埋めてきた」

作者「よくやった、君の行動は賞賛されるものだ」

カイ「さすがロミ」

ロミ「てへへ、あ、カイ君のインタビュー終わった？」

カイ「終わった」

作者「つて事で、カイ君、隣の部屋の掃除してきてよ」

カイ「なんで俺が!？」

作者「一対一のインタビューだからです」

カイ「掃除はなんで!？」

作者「ロミとジジイの戦いで、部屋が汚れたから」

ロミ「あ、ちょうどいいね」

作者「でしょう?」

カイ「ああああ、もうわかったよ!」

ロミ「いつてらっしゃーい」

作者「いてらー」

作者「さて、インタビューです」

ロミ「はい」

作者「では、まず、カイ君との旅はどうですか？」

ロミ「結構楽しいです。カイ君は、少し頼りないところもあるけれど、しっかりするときはずっかりしていて…」

作者「フムフム」

ロミ「時々かっこいいところもあって。まあ、とても楽しいよ」

作者「フム、ロミ、カイ君のこと好き？」

ロミ「えっ、あ、あのお…ま、まあ、好きか嫌いかだったら…好き

…かな」

作者「何その反応…w」

ロミ「も、もう！次！」

作者「はいはい、フランクリについてどう思いますか？」

ロミ「ただのロリコン変体ジジイ」

作者「カイと同じ結果かw」

ロミ「カイ君もかw」

作者「最後、第二十五話で、できた、謎の男については？」

ロミ「設定がキモイ…あ、さっきそのインタビューしてたのねw」

作者「そうそう」

ロミ「カイ君も同じか」

作者「正解です」

ロミ「あ、こっちからも質問」

作者「はい、なんでしよう」

ロミ「この小説、どこまで続くんですか？」

作者「…はつきり言くと、どうしてここまで長くしたっていつくらい長くします」

ロミ「三章あるんだっけ」

作者「ハイ、特に二章めが長すぎる」

ロミ「あ…がんばってね」

作者「コレ完結まで、絶対に3年くらいかかりそうw」

ロミ「がんばw」

作者「ハイ…」

カイ「ただいまー」

作者「おかえりー、どんだけ汚れてた？」

カイ「染みているところもあつたけど、そこはしょうがないよね」
作者「ん、そうだな」

ロミ「ごめんなさい、あそこまで汚しちゃって…」

カイ「ロミが謝ることじゃないよ。あいつのせいだよ」

作者「確かにそうだね、あいつが変態すぎるから…」

- フランクリの話で1時間 -

作者「さて…話しつかれたし、そろそろ解散しようか。」

カイ「あ、うん、そうだね、じゃあロミ、ガリルにワープしよう」

ロミ「ん、お疲れ様でしたー」

作者「おつかれさまでしたー…あ、ゴミー！」

カイ「え？あ、ゴミ忘れてた」

ロミ「いつけない、カイ君、もってきてよ。」

カイ「めんど…魔法使おう」

- テレポート -

カイ「ただいまー」

ロミ「おかえりー」

作者「おかえり、じゃあまたねー」

カイ「はーい、さよならー」

ロミ「さよならー」

フラ「…ワシ来た意味ない」

作者「あ、力尽きた」

ヒュン…

作者「…血が染み付いたって…どこだろ…洗わなきゃ」

番外編二 ガリルからローレックに行くまでの会話（前書き）

まずは：スイマセンでした：更新一日遅れてしまいました：

まず、作者は先週風邪をひきました。そのときは木曜日のぶんまで書いている状態でした。

しかし、風邪が治ったのは土曜日なのです。日曜日はそのまま疲れて寝ていました。

そして月曜日、体育が長距離をやっていて、さらに疲れ、寝てしまった。

結局月曜日書けないで寝てしまったのです。

全力な作者の言い訳でした。まあ本当のことですけれどね。

番外編二 ガリルからローレックに行くまでの会話

旅の途中…

ロミ「カイ君…そういえば前にフラン爺のお嫁さんのこと、チラッと話したじゃん？」

カイ「ああ…あとがきで？」

ロミ「そうそう、あのこともっと知りたくない？」

カイ「あー…詳しく聞かせてほしいかってこと？」

ロミ「うん、フラン爺からもらった手紙に全部書いてあったんだ…」

カイ「へー…確かに興味はあるな…」

ロミ「よし、じゃあ昔話形式で話すね」

カイ「了解」

むか〜しむかし、ある王都に、お兄さんとお姉さんが住んでいました。

お兄さんとお姉さんは、ある日、合コンで出会いました。

お兄さんは、とても変態で、合コンではあまりものでした。

お姉さんは、顔がとてもきれいだったのですが、とても静かな子だったので、合コンでは人気がありませんでした。

余りものな二人は、その合コンで仲良くなり、ついに結婚しました。

結婚した後、二人は王都から、ある、小さな村に移住しました。

二人はそこで、大きな家を作りました。

その家で、二人は子供を作りました。

生まれた子供はとてもかわいい女の子でした。

なので、そのお父さん（お兄さん）は、とても喜び、その娘のため

に、いろいろなことをしてあげました。
ある時は王都につれて行き、ある時は、でかい島に行きました。

ところがある日、お父さんが東の大陸へ仕事に行ったとき、お母さんは逃げてしまいました。

お母さんは、娘が生まれてから、お父さんから、自分への愛情を受けてないと思ったそうなの。

しかし、お父さんは、そんなお母さんを探しませんでした。

お父さんは、娘を大事に育てました。

ですが、それが仇となり、娘は何でもほしがる強欲な子になってしまったらしい。

お父さんはそれでも欲しがるものはすべて与えました。

そしてその娘もついには結婚し、家を出て行くことになりました。
お父さんは泣いて喜び、幸せに暮らすんだぞ、と大金を渡して去りました…

ある日、その娘は子供を生みました。かわいい女の子です。

しかし、子育てをしたがらないその娘は、娘と父親を置いて、父親からもらった大金で、前に連れて行ってもらった東の国へ逃げようとしてました。

その時乗った船は、もともと古い船でした。

その船はスクリューが故障して、さらに浸水、その船は沈んでしまいました。

残された父親も後を追うように馬車で崖から落ちて、死にました…
もう一人の残された女の子は、お爺ちゃん（お父さん）（お兄さん）に保護され、そのまま暮らしたらしい。

それが今のフランクリとロミだったらしい…めでたしめでたし（？）

カイ「ジジイってそういうやつだったんだ…」
ロミ「うん、本当に何でも買ったらしいよ。」
カイ「へー…もしかしてジジイの倉庫にあった品って…」
ロミ「うん、たぶんその時買ったものだよ」
カイ「だから装飾品とかもあったのか…」
ロミ「貰っちゃえばよかったのに」
カイ「いや、さすがに良くないかなって思って…」
ロミ「まあね、そういえばカイ君の過去は？」
カイ「ええと…」

むか〜しむかし、ある日本のどこかに、蒲原零斗という少年がいました。

少年は普通に暮らし、中学校に行き、テニス部に入りました。

ロミ「てにす部って何？」
カイ「あ、ロミはわからないか…」

ある日、部活でつかれて、ソファで寝てしまった零斗は、おきた時に見知らぬ森へいました。

「あれ？ここはどこ？私はだれ？…昔のことは思い出せる…あれ？名前？…なんだっけ…あ、零斗か…名前はどつでもいい！ここは！？地球か！？」

彼はパニックななりつつ、小さな明かりを発見した。
そうして彼はその明かりに向かって歩いた…

カイ「それが僕の過去」

ロミ「ふうん…面白い話無いの？」

カイ「面白い話？」

ロミ「ほら、なんかあるじゃん、学校での恥かしい話とかさw」

カイ「面白い話って言われても…！」

ロミ「なんかあったの？」

カイ「あった！」

それは、零斗が小学校6年生の、卒業式の練習のときだった

零斗は、友達に今回の中心人物の、ある男の子がいた。

彼は、卒業式の練習のときとんでもないミスを犯してしまったのである。

ロミ「おもしろそう〜」

カイ「本当に面白いんだよね…w」

ある日、彼は卒業式の練習をしに行くとき

「トイレに行きたい」

と言ってきた。

零斗は、「我慢しろ」と言っ、そのまま体育館の中に入っていた。

体育館に入っても、「トイレにいきたい、トイレにいきたい」と、同じことを繰り返し言い続けていた。

練習のときも、彼の顔や首には、冷汗がたれていた。

彼はその後も先生に言わず、ただ、じっと立っているだけだった。

しかし、すでに彼の尿意は限界まで達していた…

零斗が大丈夫か？と声をかけても、返事をする事ができないほど、彼はやばかった。

彼の額には冷汗が出ていた…

彼はついに我慢できなくなった。

みんながいるところで…

彼は倒れた。みんなの前で

当然皆はそのほうへ向く。

零斗も、「どうした！？」と慌てた彼の股間付近はすでにぬれていた…

もう一度、どうした？と聞くと、彼はこういった

「あ、雨漏りだよ…」

心の中で零斗はこう思った。

(こいつ絶対漏らした…)

零斗は近くにいた先生に駆け寄り

「先生！ 君がお漏らししました！」

と、報告、彼はそのまま、先生に半べそで、保健室に連行された。

彼は体操着に着替えて、そのあと、何もなかったかのように、練習をしたという…

ちなみにそのことは彼が中学校に行ってからでも、語り継がれていく…

番外編二 ガリルからローレックに行くまでの会話(後書き)

ロミ「さて、作者。本当のことを言ってもらおうかしら？」
作者「はい？」

カイ「雨漏り事件、作者は誰かのこと、本当におこったことを書いてるだろう」

作者「…イ、イエ…別に…作者が考えm」

カイ「なわけないよね…作者クン？」

作者「ヒイツ！ワ、ワカリマシタ、本当のことを話します…」

ロミ「早く言つてよ」

作者「ハイ…まず、これは…小学校のとき、友達が本当に起こした事なのです…」

カイ「…作者じゃないの？やったの」

作者「ハ、ハイ」

ロミ「…ジジイめ…なにが「あれは作者が実際にやった事」だ…」

カイ「ロミ、人格変わってるよ！」

ロミ「あいつは自分が最近出番がないからってウソつきやがって…」

カイ「作者！ロミをとめて…」

作者「…殺す…殺す…ジジイめ…大嘘つきやがってエエエエエエエエエエ！…！…！ロミ！行くぞ！ジジイを殺すぞ！」

ロミ「オウ！」

カイ「ちょ、待て…戻って来いロミ、作者！カムバアアアアアアアアアアアアアアアック！」

・フランクリの家・

フラ「おう、なんじゃ急にわしの家に…！？」

第二十七話 ローレックに到着！（前書き）

今回…いや、ローレック編は暗い設定です。

しかし…最近ゲームもできないほど忙しい…

第二十七話 ローレックに到着！

「あ、あれがローレックかなあ」

「多分そうだね」

僕たちはガリルを出発し、ローレックに向かっていた。途中ゴブリンに襲われたりしたが、あっけなく撃退。そのまま敵はいなくなり、話をしながらローレックにつくことができた。だが、時間はかかり、すでに時間は夜だ

「ガリルとおんなじで小さい村だなあ、町の明かりでわかるよね」

「うん、でもガリルよりは大きいんじゃない？」

「あ、そうだね」

・ローレック西門・

門につくと二人の警備兵が立っていた。町の外は比較的敵は少ないから安全だ、とガリルの村長が言っていた…気がする

「何かあったのかな？」

ロミが聞いてきたけど…僕もわからないや…

「ちょっと聞いてみる。ロミ、待ってて」

「了解」

僕は門の警備兵に話しかけるため、警備兵に駆け寄った…すると

「誰だ！怪しいやつめ！捕まえる！」

「え！？ちょ、待って…うわああ！」

なぜか僕は警備兵に捕まりそうになる。とりあえず逃げると、警備兵は深追いせず、そのまま元の位置に戻った…とりあえず、ロミの所に戻ると、いきなり…

「カイ君、ギルドカード」

と言われた。

「え？」

「ギルドカードはその人を特定できるものだから、身分証明証として使えるの。警備兵に見せれば警戒は薄れるわ。」

「へー…もう一回いってみる」

「行ってらっしゃい」

今度こそ僕は警備兵に話しかけるために、ギルドカードを手に持って話しかけようと、近寄った。警備兵は今度は

「ギルドカードを見せろ」

と言ってきた。カードを見せると警備兵は名前とギルドの紋章、そしてギルドカードの裏を見た。

そのまま警備兵はカードを返し、門を開いた。

「すみません、なんでここまで厳重にしているんですか？」

僕は警備兵にそうきくと、その警備兵は

「君はここら周辺の者では無いのかな？」

「はい」

本当はここら周辺どころか世界まで違うが…

「最近、ローレック内部で、盗難、強盗、殺人などが横行しているんだ。そのために警備を厳しくしている。」

「犯罪…ですか」

「ああ、この町にいるランクSの冒険者ハンターに町の外のことは任せて、我々警備兵は町の中を警備しているのだ。」

「だからさつき追われたのか…」

「お前か！そのときギルドカードを素直に見せてくれれば追つことはなかったが…」

「すみません…あ、それと僕の連れがいるんですけど…」

「すぐ呼んでいい」

「どうも……」

とりあえずロミをつれてくることの許可がおりたため、ロミを呼び、再び警備兵の前に行く……すると、さっきよりも門の中が騒がしかった。

「何かあつたんですか？」

「ああ！今日7回目の盗難だ！しかも住民じゃなくて、観光客や冒険者がやられてんだ！お前たちも気をつけるよ！」

「あ、ども」

「どうも……どうする？カイ君。このまま入ったらまた疑われたりとか、逆に被害にあつたりしそうだけど……」

「んー……今日は野宿にする？」

「……町の近くで野宿っていうのも悲しいけど、そのほうがいいかね」

「だね、町のそばは危なくないって言ってたしね。」

「うん、カイ君、探険セットのテント張っておいて！まわりの状況を確認してくる！場所はここでもいいよね？」

「あ、うん。わかった、いってらっしゃい」

ちなみに今いる場所はローレック西門からちょっと北に行つたところだ。ちよつとといつても、この場所からは門は見えないほど遠い。

しばらくするとロミが帰ってきた。

「カイ君、こちら辺には魔族とかはいないけど、オオカミとかは出るみたい。なるべく壁のそばにテントを移動したほうがいいと思うよ」

「了解」

そのあとテントを壁側によせたあと、そのまま僕とロミはテントの中で眠った。

- 次の日 -

朝目が覚めて、テントの外に出てみると、町の方が騒がしかった。門の警備兵に聞いてみると

「朝から殺人だとさ。殺害されたのは30前後の男、身元はわかっていないそうだ」

と言っていた。

「は、入りたくないな…」

「そうそう、一応教えておくが、襲われたとしても正当防衛で相手を倒すこともできるぞ。まあ殺すとそれは適応されないがな。」

正当防衛がこっちにあつたとは…しかも日本と同じだぞ…
僕の親が、殺人犯に偶然出会つたとき、父が蹴り倒し、そのまま半殺しにしてしまったことがある。

そのとき、警察は「過度な防衛は、自分にも刑が来ることがありますから気をつけてくださいね」と言われたらしい

「わかりました。気をつけます。」

「ああ、若いやつへの攻撃はあまりないが、気をつけるよ！」

「ありがとうございます！」

・テント・

テントに帰るとロミがちょうど起きた。

ロミに門番から言われたことを伝えた。ロミは、「わかった」と言いながら「とりあえずご飯が食べたい」と言ったので、食料調達で、町へでることにした。

門番に許可を得て、町に入ると、そこは本当にひどい場所だった。

まず、道には血のあとや、食べ物のゴミなどが散乱していた。

さらに酒の臭いなどが充満していた。広場に行ってみると、草むらの中に人骨があつたりした。ゴミ箱を見ていると中にはからつぽの財布がつまっていた。

「ロミ、これ…宿に泊まるより外でテント張って寝る方がいいよね

…」

「さすがに…その方がいいと思うよ」

「だよねえ…あ、まずは、ガリルの村長がいつていた腕の良い鍛冶屋を探そう。そしてその人にこの町のことを聞こう。」

「それがいいね。あ、あれじゃない?」

ロミが差したのはけっこう豪華な家だ。家の前にある看板には確かに『鍛冶屋』と書いてある。

ロミが差したその家に行ってみると、50くらいの男性が鉄を打っていた

「すみません!お聞きしたいことがあるんですけど!」

僕がそういつとその男性は鉄を打つのをやめてこちらにきた。

「なんだボウズ。聞きたいことってなんだ?」

「この剣について知りたいんですけど…」

僕が剣をその男に渡すとその男は興味深そうにその剣を見つめた。男が柄の部分を見ると一瞬驚いた顔をした。

「どうかしましたか?」

「ああ、この剣…魔力を通すことで攻撃力が半端なくあがる仕掛けがしてある。さらにこの剣、切れ味が落ちない仕掛けまでしてやが

る…この術をかけたやつは相当腕のいい魔術師だな。ただ欠点もある。こいつは魔力を通し続けないと攻撃力が上がる効果は30秒で消えてしまう。しかも、魔力が通常より高くないと使えない。これは魔力が人一倍ある剣士が使えば、相当なものになると思うぞ。」

「へえ…そんな効果が…」

「お前さんの剣か？」

「そうです。」

「そうか、この剣は大事にしろよ。今はこんな術をかけれるやつは2、3人しかいないんだからな」

「そ、そこまで高価なものなんですか…」

「ああ、宝だ。できればこの町にはあまり長くないほうがいいな。その剣を狙うやつも出てきそうだ。」

「ありがとうございます。」

「ウム、金なら取らないぞ。普段は鑑定料として金をいただくんだが…こんな高価なものを見せてもらえるなんて…お前さん、本当に大事にしるよ?」

「わかりました。」

「そうだ、お前さん達は今日この町にきたのかい?」

『はい』

「そうか…昔はこの町も治安はよかったんだが…村長が病気で倒れてから、急に治安が悪くなったんだ。」

「へえ…」

「村長に会いに行くなら、それなりの覚悟をしたほうがいいぞ。うわさで村長は死んで、かわりに極悪秘書が裏でいろいろしていると、言っているんだ…気をつける?」

「はい、色々ありがとございました」

・広場・

「ロミ、これからどうする?」

「んー…とりあえず…」

「ん?」

「お腹すいた」

「あ…忘れてた…」

第二十七話 ローレックに到着！（後書き）

カイ「作者、いろいろと大丈夫か？」

作者「（精神的に）死んでます…」

ロミ「重症だね…」

フラ「そんなときにはぜひ！s（カイ、作者、ロミ）「死ね！」

作者は スピア オブ ライト を くりだした！

フラ は 2147 ダメージ を 受けた

フラ は 倒れた！

カイ「スピアオブライト！！ググりましたよ！！」

第二十八話 ボス同士の戦い（前書き）

時間ができたので書いてみた。MH3は結構進んだけど小説は進んでないんだよね…W3面の構成はできているので、これからどんどん更新していきたいと思います。…不定期更新で…（殴

第二十八話 ボス同士の戦い

「カイ君、この店はまともじゃない？」

「んー町の中心部だし、大丈夫だとおもうよ。」

現在、飯を食べる場所を探しています。

鍛冶屋のおじさんに聞いたんだが、ローレックの店は、ぼったくる店や、よくスリが出る店が多いそうだ。おじさんが言うには、次の5つに当てはまれば、安全な店だそうだ。

- 1、防犯カメラがある。（スリ防止）
- 2、店内がきれい
- 3、混んでいない（スリ防止）
- 4、メニューがきれい（汚いと値段が見えなくされている可能性がある）
- 5、店員の胸に名前が書いてある

と、言っていた。

ロミが指している店は少し混んでいるが、これぐらいの混み具合なら大丈夫だと思うぐらいだった。

「ん、この店にするか」

「そうだねー」

店に入ってみると、客の大部分が門のところにはいた兵士と同じ格好をしていた。

開いている席を見つけ、座ると、後ろから誰かが声をかけてきた。

「昨日のボウズじゃねえか、あの後門に入ってなかったがどうしたんだ？」

「あ、昨日の警備兵ですか？」

「そうだ、たった今警備が終わってな、飯を食いに来た所なんだよ。で、あの後どうしたんだ？」

「野宿しました。」

「おいおい…ずいぶん危険なことするな…もちろん、町のそばにテントを張ったよな？」

「はい、オオカミがでるそうなので…」

「最近はおオカミとかが増えてて危険だから、野宿はしないほうがいいぞ」

「わかりました。そういえば、さっき、『村長は死んで極悪秘書が裏で何かしてる』って噂を聞いたんですけど…」

「もうそこまでわかったのか。確かに、村長は、秘書の知らせで、東の国に行ったって言ってる。」

「それ、いつ公開された情報なの？」

「お、嬢ちゃん、いいこと聞くな。公開されたのは1週間前、つい

最近のことだ。だが、村長を最後に目撃したのは、1ヶ月以上前、もしかしたら、もっと早くに殺されているかもしれない。」

「そうですか…監禁されている可能性はあるんですか？」

「わかんね、でも、監禁されてたら町外れの廃屋が怪しいな。あそこでは町の不良が、こそこそ何かをやっているって言う噂だ。もしかしたら、そこに何か手がかりがあるかもな」

「わかりました、ロミン、どうする？」

「了解っ！」

「おいおい、行く気か？俺たちでも勝てるかわからねえ軍団だ。やめといたほうがいいぞ」

「この町を良くしたいんで！では！」

「お、おい…どうなっても知らないぞ…」

・ 町外れの廃屋 ・

「多分ここだよね…」

「うん…ずいぶんでかい廃屋だね…あれ、中でなにかしてるのかな。」

僕たちは警備兵が言っていた廃屋に着いたけれどどうやら、中で

誰かが戦っているようだ。

「ロミ、2階の窓から入ろう。」

「OK!」

2階の窓に土魔法で階段を作り、入ってみると、ちょうど1階で行われている戦いが見えた。

「あれっでもしかして…」

「ガリルにいた…ボスだよね…」

なぜかガリルで戦ったボスがいた。ボスの手下達もいる。

「なんでボスがいるんだろ…」

「さあ…」

「とりあえず観戦してみよう」

ボスは、相手側のボスと、ボスの手下は相手の手下と戦っている。ボスの手下達は相手側の手下達と互角の強さだが、ボスと相手側のボスは相手側のボスののが上のように見える

相手側の手下達は弓で攻撃している。接近戦では矢で攻撃しているようだ。ボスの手下は剣。海賊が使うような剣だ。ボスの手下が剣を振れば、相手側は矢で防ぐ。相手側が矢を射ればボスの手下は剣で防ぐ。といった攻防が続く中、ボス同士の戦いはヒートアップ

していた。

ボスは剣、相手はメイス（メイスは単体棍棒から発達した武器で、重量のある柄頭と柄の二つの部位からなり、複数の部品を組み合わせて構成される合成棍棒の一種である。棍棒と同様に殴打用の武器で、柄の先に重い頭部を有することにより単体棍棒より高い打撃力を生みだす事ができる。byウィキペディア）を使っている。ボスはメイスの独特な柄頭に苦戦していた。

相手側のボスは、ボスの攻撃を華麗に避けて、その隙にメイスを振り下ろす。という、攻撃方法だ。ごり押しのボスは、少し苦手な相手だった。

「ボスが少し押されてるね…」

「うん…相手側のボスが強いし…武器の違いにも差があるかも…」

「相手側の戦法がいいんだよね…あ！ボスが！」

話していると、ボスが攻撃をくらい、倒れてしまった。

そこにとどめを刺そうとする相手側のボス。しかし、相手側のボスはとどめを刺さずに言った。

「今、お前らが退けば命だけは助けてやる。悪いな、これもじきに村長になる『トエナ』のためだ。」

「誰が退くかよ…『トエナ』なんか…元暴力団長だったトエナに

…この村を任せたら…このマトウーが終わってしまうだろ！」

…暴力団長！？そんな奴だったのか極悪秘書って言うのは！

「ほう…こんな状況にあっても退かないか…まあいい、退かなかつたことを後悔するがいい。」

そういうと、相手側のボスはメイスを振りかぶった。

第二十八話 ボス同士の戦い（後書き）

カイ「作者クン」

作者「はい？」

カイ「今まで何してた？」

作者「誕生日を寝てすごしたり、冬休みが始まってダラダラしてたり、正月にはでかけたり、お婆さんの家にいたりしてました。」

カイ「小説は？」

作者「まったく更新してません」

カイ「…ゲームする暇あるなら勉強か小説更新しろやああああっつつつつ！！！！」

作者「冬休みはまったりするのがいいだろう！」

カイ「冬休み前から更新してないじゃないか！」

作者「っ！ゲーム発売されたんだからしょうがないだろう！」

カイ「だから、ゲームする暇あったら勉強とか小説更新とかしろよ！！！！」

作者「だから、冬休みはゆったりするのがいいでしょう！」

カイ「だから、冬休み前から更新してな（ry」

作者「だから、ゲームが発売（ry」

この争いは2時間に及んだという・・・

というか「作者」と、変換しようとしたら、「悪者」ってでたんだが…ひどい誤字だな…（といいながら「誤字」に変換しようとしたら「護持」と、出た件について

第二十九話 新たなパーティー（前書き）

今回のテストは勉強するので、更新はそこまで出来ないと思います。
…まあ、いつものことだけれどw

第二十九話 新たなパーティー

「ほう…こんな状況にあっても退かないか…まあいい、退かなかったことを後悔するがいい。」

そういうと、相手側のボスはメイスを振りかぶった。

「危ない！」とカイは飛び出したが…すでに相手側のボスはメイスをボスの頭に落とそうとしている所だった…

(間に合わない…)

カイがそう思った瞬間、横から轟音が聞こえた。そしてその音は瞬時に相手側のボスのメイスへ向けて突進する。

(なんだ!?)とカイが思ったときには、すべてが片付いていた。

建物を破壊したせいででた煙が収まると、人の姿がくつきり見えるようになってきた。

その人はロミのほうへ歩き…

「こんにちは、ギルドカードの件、ありがとうございます。」

と言った…ギルドカード?…あれ…どっかで聞いた覚えが…

「あの時の!」

「そうです。しかし…危なかったです…もう1秒遅れてたら、たぶんそのボスは死んでいました。」

「あの時の…そうか！ランクスの！」

「おや…君は…」

「カイといいます。」

「フム…そういえば名前は聞いてなかったな。そちらは？」

「ロミです。」

「そうか、ロミか、ティナイルの村長の娘だったかな？」

「はい…あれ、何で知ってるの？」

「まあね、女の子のこと…グフングフン！前にティナイルにいったときにストーカー…ゲフン！調べたんだよ。」

「…変な言葉が聞こえた気がするけれど気のせいかな？」

「気のせい気のせい！かわいい女の子だったからストーカーしたなんて言っていないよ！」

その後、ロミがボウガンでそいつを撃ちまくったのは言うまでもない。

・ 3分後 ・

「まいった！許してくれよ！」

「いいえ…私がお前を殺すまでは許さない…」

- 5分後 -

「やめて！もう僕のライフはもうゼロ…」

「だまって、さっさと死ね」

- 10分後 -

壱の矢 - ポイズンショット -

「ギャツ！当たったらヤバイって」

「ヤバくしてるんだよ！」

- 30分後 -

「ゼーゼー…疲れた…」

「最後に…」

壱の矢 - クロスショット -

「あ…もうムリ…」

グサツ！

- 5分後 -

現在、相手側のボスの家はひどいことになってます。
ボスが横になってる所以外、矢が壁に刺さっています。
そしてランクSの人はというと…

「ひ、ひどい目にあっただ…」

「二度としないって誓うなら助けてやる」

現在ロミの前で土下座してます。僕は部屋の隅に避難しています。
だってロミが怖いんだもん…

「わ、わかりました、もうしません、許してください、お願いします。
お願いします、許してください、もうしないから頼むから許して
…」

「心がこもっていない！ちゃんと謝ってよね！」

…こんな感じで怖いです。

「このとおり！堪忍しました、なので命だけはお助けを！」

「ム・リ」

「お願いします、なんなら今望んでいるものを差し上げるので許してください！」

「あら本当？なら貴様の命を…」

「それ以外でお願いします！」

「わがままですね…では貴様の持っているものすべて…」

「やめてください、お願いです。そんなことしたら僕はどつやって生きていけば…」

「んー生きられないんじゃない？」

「死ねばいいとおもつよ」

「それ以外で…」

もう…ロミじゃなくなっている…誰か元に戻して…

「じゃあ…ギルドカードを捨ててよ!」

「やめてください!そんなことしたら僕はどつやって生きれば…」

「だから、死ねばいいとおもつよ」

「それ以外…」

「しょうがない…なら…まあ、この町の極悪秘書を倒してよ!」

「!?!」

あ…やっとすこし落ち着いたかな?

「嫌だというならば…」

「わかりました!そうします!だから死ねと言うのはやめてください

い！」

「とうとうことでカイ君、しばらく、この変態が仲間になるからよろしく。」

「…え、あ、はい！よろしく…」

「こちらこそ…って、もしかして貴方も極悪秘書を倒しに？」

「はい、そうですが？何か？」

「奇遇ですね、私もその目的でここに着たんですよ。」

「え？ではやっぱりここに何かあるんですか？」

「ええ…このボスが、村長の監禁場所を知っているらしいのですが…今、この状態なのでね…どうしようか迷っているのですが…」

「それなら任せな！」

『！…』

「それは俺が知っている。だから、俺も極悪秘書を倒すのに参加するぜ！」

「ボス！もう大丈夫なの？」

「もちろんだ！あれくらいでくだばる男じゃねえよ」

「ですが、『フォド』。いくらあなたでも、その体で、トエナを倒

すことはできません。」

「何言っているんだ『グリヌ』！俺はガリルなどで修行を積んで、昔より100倍強くなったんだぞ！」

「…ですが、このカイ君には負けましたよね？」

「グッ」

「それも…習得した技の違いと、年の差でも…」

「…」

「さすがに、今の貴方では連れて行くことはできません。いいですね？」

「チッ、わかったよ…でも、村長の監禁場所までは行ってもいいだろ？」

「もちろん。ということでもいいかい？カイ君、ロミちゃん」

「え？別にいいですけど…ロミ？」

「…気安く『ロミちゃん』とか呼ばないでくれる!？」

「ヒイ!!」

「…大丈夫だよ…このパーティ…」

「さあ…大丈夫じゃないと思うよ…」

第三十話 地下室にロー！（前書き）

はい、えーっと、2ヶ月もたってしまいました…ごめんなさいw
あっはっはw…睨まないでください…

第三十話 地下室にゴー！

その後、ボス：フォードに案内され、ロミのせいでボロボロになった家の中にある隠し階段を下り、地下水路に到着した。

地下水路は、暗くて、ひどい臭いがして…さらに足場がせまいという、ひどい場所だった。

つつかこれ、どこに向かっているんだ？

「フォード、どこに向かっているの？」

あ、ロミが聞いた。

「ボスのがいいんだがなあ、まあいい、今向かっているのは、今は秘書の基地となっている、村長の屋敷の地下だ。」

「具体的な監禁場所を言うとだな…」

割り込んできたグリヌが説明するには…

村長は、現在、村長の屋敷の地下にある、牢屋に閉じ込められているらしい。だが、監禁場所に行くには、現在秘書がいる村長の部屋と、元暴力団部下たちの、基地アシトからしかいけない設計になっているらしい。

先に村長を助けるには、暴力団の基地アシトから行ったほうが早い。グリヌはその方法をとっていたらしい。

ただ、ひとつ難点なのは、監禁場所が迷路になっていることである。

グリヌによる下調べによると、牢屋の道は迷路になっているため、村長の発見がとてもしにくい状態らしい。

おまけに、先ほどつぶした基地に、もしかすると、探知機マジックのようなものが合つて、もうすでに、僕たちがここにいる事がばれているかもしれないらしい。

そんな感じで、今僕たちは早足で牢屋への道を進んでいる。

「つとつか、グリヌ、どうやって牢屋が迷路だつてわかったの？」

「ああ、探知機だ」

…え？

「探知機なんてあるの？」

「ああ、科学と魔法の町、ダバンハにいる友人に頼んでな。」

ダバンハ…とは、このマトウーの王都だ。

「へえ、意外と顔が利くんだね」

「まあね、ランクSだから」

そんなことを話しながら進むと、道が二手に分かれた。

「どするっ…」

「まあ…二手に分かれるか」

って決めるの早いな…とりあえず分かれることに決まった。

「なにできめる?」

「アレしかないでしょ」

「アレ?」

…ジャンケンだ!

「ジャンケンってなに?」

「どつやるの?」

「知らないか…」

と、いうことで3人にジャンケンのルールを教える…

『最初はグー!じゃんけん…ポンッ!』

…えーっと、僕がチヨキ…ロミがグー、フォドがパーで、グリヌはチヨキ…あいこだな。

『あいこで…』

数回あいこが流れたのでとばして…

結局、僕とロミ、グリヌとフォドで別れることになった。

・カイ視点・

僕たちは左の道をいくことになった。敵などはまったくでこないため、ただの探索だ。

水路内の道はさっきよりもせまくなっていて、右側にカーブしているようだった。

ただ、その道をずっといくことだけで、ほかにすることは何もなかった。

…え？暇じゃないかって？もちろん暇です。ってことで、ロミに異世界の遊びを教えてあげる。

「しりとり？」

「うん、たとえば、最初に僕が、「イカ」っていったら、ロミが、「か」から始まる単語をいえばいいの。でも、次に「缶」とか、「ン」で終わると、その人の負けになるんだ」

「なんで？」

「だって、「ン」から始まる言葉ってないじゃん？」

「なるほど…」

「っていう、ゲーム、やらない？」

「いいよー」

「じゃあ、さっきの続き、「カ」でロミ、ビビゾ」

「漢字！」

…なんでロミが知ってるのかというと、僕が教えたからだ。いや、ただ制服に書いてある僕の名前について聞かれたとき教えたただけなんだけれどさ

「ジか…ジジイ」

「イカ！」

「あ、同じ言葉はだめだよ。それじゃあ何回も繰り返すことができないからね」

「難しいよー」

「覚えれば簡単だよ。」

と、楽しくしりとりをしているうちに広いところに出た。

「ここどこだろう…すごい広いね」

「うーん…道がカーブしてたから、もしかしたらボスたちも、こっちに向かってきているかもね…ってあ！」

「え？…あ！ボスたちだ！」

僕たちがいるところから反対の道には、グリヌとフォドがちょうど歩いてきていた。

「お、お前たち…そっちの道は、なにもなかったか？」

「うん、怪しいものとかも何もなかったよ？」

「うーん、これで行き止まりか？」

「道、どこかで間違えたかなあ……」

それぞれが諦めかけっていると、部屋の壁のほうから、不気味な機械音がした。

「…え？何？」

「…やっぱりこの部屋になにかあるのか」

「気をつける！くるぞ！」

フードがそういつた瞬間、いつきに壁が崩れ、巨大な鉄の塊が姿を現す。

「…なにこれ！」

「こいつは…対戦車用ロボット…に、似てるけれどちがうな……」

「…改造されたってことか？」

「そうみただね、軽く人を殺すことができるほど強いから気をつけてね！」

「わかった！弱点は？」

「機械だから…水とか雷かな…きたよ！」

僕は後ろで魔法を準備、ロミも後ろで矢の援護をする。グリ又とフォドは前衛で戦ってもらう形になった。機械は腕の部分が大剣とガトリングガンでできているというチートな強さ。グリ又とフォドを見るとわかるが、結構硬いようだ。

機械は、大剣でグリ又とフォドと戦いながら、遠距離で、後衛の僕たちに攻撃してくる。

僕は盾で自分とロミを守りながら、魔法を放つ。

- 雷魔法 エレキテル -

前衛で戦っているグリ又たちにあたらないうように雷魔法を飛ばす。雷弾はみごと機械の大剣の腕にあたり、装甲がすこしだけくずれた。

「ナイス！」

グリ又は両手剣を振りかぶり、雷弾があたったところに振り下ろす。

ガキーンという音がしながら、くずれていた装甲は粉々に砕ける。

「よっしゃ！次は銃のほうだ！」

「了解」

フォドがガトリングガンのほうに即効で唱えたエレキを撃つ

と同時に、グリ又が走り出し、銃も叩き壊す…ことはできなかった

「硬いって…手がしびれるぜ」

とりあえず、僕もエレキテルを放つちゃんと銃の腕にヒットして、

そのままフォドが双剣で参の刀の技を放つ

・参の刀 空牙くづが・

ガトリングガンの腕は崩れ、木っ端微塵になる。

「おーっし、最後は機能を完全停止だな」

「いくぜ！」

僕は、ロミに、即効で考えた作戦を言う。その作戦は、ロミはボウガンで、壊れた腕の部分に向けて矢を放つ。そこに、僕が雷魔法を放ち、導線から体に電気を送り、機能を停止させる。という作戦だ

ロミはクロスショットで、2本ずつ矢を放つ。そして、そのうちの一本が腕に刺さった。

「いまだ！」

しかし、機械も抵抗するため、エレキテルを避けられる

「チツ、なら…」

・雷魔法 ライ・

敵に向けて放つエレキテルと違い、ライや、サンダーは敵の頭上に放ち、そこから雷が落ちる、という技なため、簡単によけることはできない。

みごとライはロミのうった矢にあたり、そこから機械全体に雷が

とおり、ショートする。

「よっしゃ、とどめだ！」

グリ又は剣を振りかぶり、機械を真っ二つにする。フォドは双剣を槍ランスのように使い、機械に突き刺す。

機械は機能を完全停止し、粉々になる。

「ふう…何とか倒したな。」

「だね、手強い相手だったな。」

「手がしびれたぜ…」

僕も、マナを半分ほど使ってしまった。

「よし！じゃ、機械が壊した壁のところ、いってみますか！」

「おー！」

第三十話 地下室にロー！（後書き）

カイ「遅いよ！」

ロミ「そうだよ！」

グリヌ「てか、もう少し登場早くしてほしかった」

作者「グリヌ、お前は残念だがこの町で登場する。と決めていたんだ」

カイ「決めていたのに、なんでこんなに遅いんだよ…」

作者「簡潔に言う、めんどくさくなつた！」

ロミ「…素直に削除しちゃえば？」

作者「いや、なんとしてでも完結させてみせる。」

グリヌ「このペースだと、終わるのはいつごろかな？」

作者「黙れ変態、お前は分かれ道のとき、必死にロミと一緒にいるうとしていたのを俺は知っているんだ」

ロミ「え？なにそれ」

作者「つまりだ、ロミと一緒に行くつもりだったってわけだ。」

グリヌ「んなわけないからねw」

ロミ「…本当に？」

グリヌ「本当だよロミちゃん」

ロミ「…気安くロミちゃんなんて呼ぶな！」

グリヌ「ヒイツ！」

作者「学習しないねーこいつ」

カイ「だね」

第三十一話 地下室の中で（前書き）

んー最近戦闘が少ないなー：もうちょっとちゃんと更新したいなー：
このペースじゃ終わるのは10年後になりそうで怖い作者です。
いや、100年後かもしれないな

第三十一話 地下室の中で

機械が壊した壁の所に行ってみると、そこには奥へと続きそうな階段があった。でも、周りは暗く、1M先くらいしか見えないほどだった。

僕がバツクに入れておいた懐中電灯をだして付けようとする、明かりとかけちゃったらばれちゃうから、明かりをつけるな。ってボスに言われたので、仕方なく僕は再びバツクの中にしまふ。

なるべく音を立てずに階段を上っていくと、どうやら地上の高さまで来たようで、少しだけ明かりが見えた。

「カイ、ここから先は俺に任せろ、俺とグリヌでまず見張りなどを倒しておく。俺たちが合図を送ったらお前たちもこっちに来い。」

確かに、戦闘慣れしているフォドとグリヌに任せたほうが安全だなと、おもい「了解」としておく。

こちらから見ていると、まるでどこかのゲームのスニーキングミッションのように、物陰に隠れて相手の様子を伺っていた。

僕も後ろから不意を突くみたいないな技もあったほうがいいかなーとか思いつつ、フォドとグリヌを見る。

彼等は無駄な動き一つせず、見張りの隙を突き、一人ずつ確実に落としていく。

見張りの全員が横になるとフォドが手招きした。

僕たちがフォドのところに行くと、フォドは走り出しドアの方へ行く。

フォドは静かにドアを開けると、中にある見張りの数を確認しつつ中に入り、身を潜める。

これを繰り返し、奥の部屋まで行くと、そこにはまた、地下へと続く道があった。

「カイ、おそらくこの下に村長がいるだろう。村長を見つけ次第、開放し、これで俺たちに知らせる。」

そういつて渡されたのは小型のトランシーバー。

「了解」

僕がそういつとロミにもトランシーバーをわたし、地下に続く階段を下りていつた。

「よし、僕たちも急ぐ」

「そうだね」

・村長宅 地下牢・

僕たちが降りるとそこは、掃除もされていなく、壁の鉄骨がむき出しになっているようなひどい場所だった。

やっぱり暴れる人とかがいるからかなーとおもいつつ、ロミと分かれて牢獄を探索する。

やっぱり中には本当に投獄されている人がいるらしく、僕たちを見て少し驚いていた。

…待てよ？こいつらに村長知らないか聞けばいいんじゃないか？

ってことで…

「なあ、ここら辺で村長が捕まっているところ知らないか？」

「し、知らねえよ…そ、そっだこの先の嚴重な扉のほうに何回か秘書が入っていったなあ…」

そっいって指を刺す囚人、指の先には確かに嚴重な扉があった。

「ありがとう、じゃあな」

後ろで情報提供代よこせよとか言っているやつは、ほって置いて扉のほうに行く…と、そこにはグリヌがいた。

「おう、グリヌ、なにか手がかり、あつた？」

「!?!? ああ、カイか、びっくりさせるんじゃないよ…それより、この扉、あやしくねーか？」

「ああ、囚人から聞いたんだが、ここから先、秘書がいたりきたりしているらしいぞ。」「」

「マジか…頑丈そっだが…」

そっいいながらグリヌは両手剣を抜く。

「とりゃあああああ!?!」

剣をおもいつきり縦に振ると扉は力に耐えられず、破壊される。

「よっしゃ、行くぞ」

「グリヌ、フォドへの報告は？」

「おっと、忘れていた。カイ、先に行け」

「お前に命令されるのはいやだな…」

「ひでっ！」

とりあえず命令にしたがい、中に入る。…中は血のおいがしたりして、気持ち悪くなりそうな場所だった。

おそらく、脱走したりするやつを閉じ込めておく場所なんだろうな」と、おもいつつ先に進…とおもったらグリヌが走ってきた。

「カイ、フォドも向こうで変な扉を見つけたらしいぜ」

「そうか…まあ、こっちも先に進もう。」

「だな」

そういつて、さらに先に進んでいくグリヌ。俺もその後についていく。俺達の進んでいる道の両壁は鉄格子で囲まれてばかり。それがその先へずっと続いている。

「一本道か…どこまで続くんだろうな。」

「だなあ、めんどくさいなあ」

僕達は、先が見えないほど先が長い道にうんざりしながらも歩く。

まったく風景が変わらないのでつまらない。

しばらく歩くとまた巨大な扉が見えてくる。その大きさはさきほどの扉より大きく、重そうな扉だった。

「嚴重な扉だな…こいつは、あたりかもしれねえな」

「フム…しかも鉄じゃなくてこれ鋼じゃね？」

「鋼ねえ…」

そういつて僕は扉を触る。確かに、鉄とは違う気がする。扉には南京錠がかかっているの、どうあけようかグリ又に相談する。

「グリ又、カギはどうするんだ？」

「あ？んなもん、ぶっ叩きや開くだろ」

そういいながらグリ又は背中からトウハンドソードを抜き、構えて南京錠の部分を弾き飛ばす。ガチャーンという音を立てながら南京錠の部分は吹き飛ば

「な？」

そういいながらグリ又は扉を蹴って開ける。

「うひゃー、これは…またひどい場所だなー」

俺が扉の先を見ると…そこは、生ゴミのような匂いが漂う場所だ

った。

「おいおい……こりゃ中に何があるんだよ……」

「グリヌ、報告は？」

「カイがしとけ、俺はちよっくら中を見に行ってくる」

そういつてトランシーバーを投げるグリヌ、そしてそのままグリヌは扉の中に入っていく。

「俺がか……まあいいが………えーっと……？これか」

僕は適当にボタンを押して相手につなげようとする。

「もしもし、聞こえるか？」

「ん……カイか……進展はあったか？」

「ああ、一応な、さっきの扉より頑丈な扉を発見して、その中に入ろうとしたのはいいんだが、中が異臭が漂ってる場所なんだよ。」

「フム、こちらも、今変な扉を発見したんだが……こちらもきつとそっつだろう。」

「繋がってるってことか？」

「恐らく、俺達とお前達が同じスピードで歩いてるなら、同じぐらゐの時間で同じような感じの扉にぶちあたってるわけだ、繋がってゐないはずがない。」

「なるほどなー、まあ、そっちも進展があつたら伝えるよ。」

「ああ、わかっている」

その言葉を最後に、通信を切られた。とりあえず、中にいるグリ
又ニ報告をし……ってなんかいつのまに帰ってきてるし。

「なんでグリ又戻ってきたの？」

「いや、それひどくないか？」

「いや？別に？」

「で、フォドはなんつつつてた？」

「あっちも同じような扉にあたってたってさ、恐らく、この先で繋が
つてる場所があるんじゃないかってさ」

「ああ、だろうな、俺もそう思っていたところだ」

「そうかい、中はどうだったんだ？」

「扉の中か？とにかく、すっげー暗くてすっげーくさい場所だった。
」

そついいながら鎧についた汚れを落とすグリ又

「それはここからでもわかる、変わったところは？」

「ん、ないね、とりあえず、発信機によるとこのちよつと先に村長が閉じ込められてることになるから、急いだほうがいいね。」

「そうか、了解した」

そういつてグリヌは立ち上がってまた扉に入っていく。僕も立ち上がり扉に入る。たしかにすごい場所だ。

何がすごいのかというと、まず異臭。下水とか、生ゴミとかがまざったような臭いで、はっきりいつてこんな場所からは早く出たという感じの場所だった。

そして、今までの場所は電気があったのに、今度はなぜか電気がなく、真っ暗な状態である。

僕はキャンプセットから懐中電灯を取り出し、明かりをつける。

すると、その場所の状況がさらにひどいことがわかった。

瓦礫が転がっていたり、血がついた岩があったり、拳銃があったり。拳銃の一つを取ってみると、まだ弾が入っていたので一応捨ておく。

「グリヌ、あとどれくらいなんだ？」

「もう少しだよー」

僕は退屈そうにしながらグリヌについていった。

第三十一話 地下室の中で（後書き）

カイ「そういえば作者、テストは？」

作者「期末？」

カイ「それぞれ」

作者「んー、とりあえず今回は勉強しよう、さすがにきつそうだ」

カイ「そういいながら勉強しないんだろ」

作者「いや、今回はする」

カイ「作者よ、この文をテスト終了後にみてみる、泣くぞ」

作者「泣きはしないさww」

カイ「ま、がんばれや、一応応援しているぞ」

作者「一応ってなんだよ…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0344o/>

黒髪黒目の少年勇者

2011年6月15日12時40分発行